大島正健著

# 支那古韻考

前編

자-21-1

821.1
081202

821.1
O812 a2

帝国図書館蔵書

国会
26. 1. 18
図書館

221970

# 自序

人或は問はん、古韻の研究何の要かある、二千年前の支那音は、之を知り得たりとて、幾何の効益かあると。余も亦之に答ふる所を知らず。考古學の穿鑿、人類學の攷究は、殖産興業營利生活の道に、如何程の關係ありや、是亦余の深く考へ及ばざる所なり。然れども、人の常に知らんと欲する所のものは、必ずしも、直ちに貨殖の道に關係あるべき物のみにあらず。凡そ天地の間に散在し、目に映じ耳に觸るるものにして、知り得べき物を、知らずとして過ごし行くは、また人の本性に背反す。古來我國の人、漢學を能くし、經史詩文を問はず、其道に熟達せる碩學輩出せり。獨り音韻の學に至りては、熟心の研究者なかりしにあらざるも、他に比し、大に後るゝ所ありて、尚未だ幼稚の境域を脱すると能はず。世間多數の人に至りては、古韻の用、法甚だ異樣なるも、腦中曾つて一團の疑

塊をも生ずるとなく、更に意に介せずして、過ごし去るを常事なりとす。これ余の平生大に遺憾とする所なり。

古韻の研究は、其考證博學を要す。余の如きは、淺識寡聞、素より其任に堪ふるの器にあらざるを知る。故に其企を試むるに當り、鹵莽杜撰の譏は甘んじて受くる所なり。加ふるに、余常に僻地に住し、材量を得るの便を欠き、周時代は、僅かに詩三百篇に由るに過ぎず。始は專ら詩經の古韻に心を留め、表題をも詩經古韻考と名づけて、其研究に着手せしが、後更に其範圍を擴めて、遠く唐朝の頃までに及ぼすに至れり。秦漢の時代及び其以後に至りては、只坐右に備ふる數種の書より引照せるのみにて、宛も骨を削りて、料理を試むるの觀あり。他は字彙字典等に見えたる證例を、孫引に用ゐたるにて、其原本に接したるにあらざるより、屢〻隔靴の歎あるを免れず。漢字の原音を、我古書の假名と對照するに當りても、諸書につきて、一々其用書を正すの暇なく、止むを得ずして、一に古言梯に頼るととせり。

余非才短見の身を以て、此大門題に接せんと欲するは、其權なきに似たれど、さればとて、空しく手を袖にして、坐ながら大家の出づるを待つべきにあらず。余不肖といへども、また自ら信ずる所あり。此頃古韻を探りて、聊か得たる所なきにあらず。其學、生産の道に遠きを知るといへども、知識を求むるの欲望禁じがたく、爰に其結果を公にして、識者の教示を乞はんとす。

明治卅一年一月

大島正健識

# 支那古韻考前篇目錄


總論……一頁

無尾韻の部

第一、歌と麻……二十一頁

第二、支微齊佳灰……五十四頁

第三、支と尤……六十七頁

第四、支の三類……七十九頁

第五、尤と蕭肴豪……九十九頁

第六、尤と侯……百十三頁

第七、支尤蕭肴豪と侯魚虞……百二十二頁

第八、魚と虞……百三十三頁

# 支那古韻考前編

大島正健著

## 總論

凡そ人の發音は、時を隔て、處を異にするに隨つて、變遷するは、自然の理の然らしむる所なれば、現時の音を以て、既に絶滅したる、古代の音を探らんとせば、其勞苦の結果として、滿足の成効を得るとの、初より期しがたきは、素より覺悟せざるべからず。分けて、古より今に至るまで、興亡盛衰幾朝幾代、之に加へて、四方の種族の混入せる、支那帝國の如きは、數千年の昔に溯り、其古音を原ぬるは、其業の困難なる、成効殆ど望むべからざるに似たり。

古の支那の學者詳細に音韻を論ぜし者稀なり。漢以前に於いては、未だ韻書の世に行はれたるものあるを聽かず。其研究は、中古

印度學風の感化に由り、始めて起りしものゝ如し。康熙字典に曰く、韻書の最古なる者に至つては、魏の李登の聲類に如くものなし、晉の呂靜其法に倣ひて韻集を作る、齊の周顒始めて四聲切韻を著はす、梁の沈約四聲一卷あり、隋の秦王俊韻纂有り、陸方言切韻有り、唐の孫愐に至りて唐韻出でゝ、諸書皆廢る、宋の陳彭年等廣韻を重修す、丁度集韻有り、金の韓道昭五音集韻あり、元の黃公紹韻會舉要有り、明の洪武中、宋濂等正韻を修す、此れ韻書の大略なりと。字彙に經籍史略を引いて曰く、隋の陸方言廣韻を著はすと。然らば、此書廣韻の原本なりしか。或はいふこれ謬說なりと。年代の差異に由り、韻に變化を生じ、諸書其分類同じからず。齊の陽休之が韻略には、五十六韻の別ありしといへど、唐に至りては細密となり、唐韻には二百六韻と成れり。宋の劉淵、平水韻增に於いて、之を百七韻に分ちしより、後の韻書多く此法に從へり。五音集韻には百六十韻の分類あり。正韻は他と其基礎を異にし、七十六韻に略せり。清の康熙年間に佩文韻府出でしが、其分類亦宋人の定めたる法に則れり。今詩家の廣く用ゐる所のものこれなり。其類左の如し。

上平聲　東冬江支微魚虞齊佳灰眞文元寒刪
下平聲　先蕭肴豪歌麻陽庚青蒸尤侵覃鹽咸
上聲　董腫講紙尾語麌薺蟹賄軫吻阮旱潸
銑篠巧皓哿馬養梗迥有寢感琰豏
去聲　送宋絳寘未御遇霽泰卦隊震問願翰
諫霰嘯效號箇禡漾敬徑宥沁勘豔陷
入聲　屋沃覺質物月曷黠屑藥陌錫職絳合
葉洽

古韻に至りては、其性質容易に察し得べきにあらざれど、幸に歷

朝其詩賦の存するありて、僅かに其一斑を窺ふことを得るなり。余は是より詩經を基として、二千五百年以前の古韻を探り、其れより時代を逐ひて、韻の變遷を原ねんとす。古韻と今の韻と、其の異なる所あるは、素より論を俟たず。故に古韻には、今の韻の名稱を付すべきものにあらず。然れども、斯くては韻を論ずるに不便尠からず。因りて古今比較の標準として、百六韻分類の名稱を借り用ゐるとの止むを得ざるに至れり。

古韻の辨じがたき、支那の學者も、其說明に窮する所ありたるものと見え、宋人叶韻を作りて、是が解釋を試みんとせり。常用の韻を變じて、他の類似の韻に合はせ用ゐたるは、眞の叶韻にして、其例なきにあらざれど宋人のいはゆる叶韻は、古韻の解しがたきものを取りて、今の韻に改めたるに過ぎざるもの多ければ、此の如きは、決して古韻を解し得たりといふべきにあらず。詩經の朱注に見えたる、叶韻の多數は、其實叶韻にあらずして、本韻を誤解したるなり。

蔽芾甘棠、勿翦勿拜、召伯所說。

注に曰く拜は變制切に叶ふと。否是は叶韻にあらず。齊佳は古へ同韻なりしなり。

羔羊之皮、素絲五紽、退食自公、委蛇委蛇。

注に曰く、皮は蒲何切、蛇は唐何切に叶ふと。然らず、古へ支歌は同韻なりしなり。

揚之水、白石皓皓、素衣朱繡、從子于鵠、既見君子、云何其憂。

注に曰く、皓は胡暴切、繡は先妙切、鵠は居號切、憂は一笑切に叶ふと。皓は上聲、鵠は入聲、憂は平聲なるを、皆去聲に變へて、叶韻となしたるは或は可ならん。然れども皓と鵠と、又繡と憂とを隔韻に踏む叶韻と見做したるは當らず、其は古へ豪蕭尤は一韻なりしに由りてなり。

平上去入の四聲の別に至りても、古と今とは異なりたる所あるなるべし。よし然らざりしとするも、音調の抑揚に隨ひ、處に由り

ては、其聲を變じて用ゐたるとありしは、事實なりしなり。前の揚之水の例、能く之を示す。此類の例は、他にも數多しと知るべし。要するに、古は今に比すれば、韻の數少く、又人爲の法則に由らず、自然の發音に基づきて押韻し、其往來の區域に、廣く自由を許したるものゝ如し。一說に、四聲の別は、齊梁の時代より始まりしといへども、此說容易く信じがたし。意ふに、只齊の周顒、梁の沈約などが、文字を集めて、四聲の分類を設けしのみなるべし。其以前固より區別ありしも、其以後の如く、法則嚴正ならざりしのみならん。我俗謠に、同語の音調に、處に隨ひて、緩急抑揚を許すが如く、古の支那語の音調にも、時と場合とに由りて、自由を與へ、故意に上聲を平聲に換へ、入聲を去聲に通はしたるが如きと有りしに似たり。商周時代は姑く措き、秦漢以後の詩賦の押韻法に、大躰より言へば四聲の分れたるものは、分れざるものに比すれば、多きを見



るなり。但し四聲の分別も、時と共に變遷し、漢魏より六朝に進むに隨ひ、次第に今代の法に近づき來れるものゝ如し。又古より聲を別にすれば、義を異にすることあり。左に數例を擧げ、同語に聲を轉じて、動靜又自他の別を立つるものあるを示す。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 妻 | 平聲 | ツマ | 去聲 | メアハス | |
| 空 | 上聲 | アナ | 平聲 | ムナシキ | |
| 動 | 上聲 | ウゴク | 去聲 | ウゴカス | |
| 吹 | 去聲 | フキモノ | 平聲 | フク | |
| 上 | 去聲 | カミ | 上聲 | ノボル | |
| 借 | 入聲 | カル | 去聲 | カス | |
| 讀 | 去聲 | ヨミ | 入聲 | ヨム | |

此の如き分別ありたるを見ても、往古四聲の別なかりしといふ說は、未だ首肯するを能はず。

今の詩家、古の詩賦に、其押韻法の稍異樣に思はるゝものあるを見れば、之に通韻の名稱を附し、單に某韻は某韻に通ずとのみ言ひて、其の然るゆゑんを辯ぜず。竟には作詩の術に、窮屈なる通韻法を設くるに至れり。今の通韻には、古は全く同韻なりしものあり、或は又其響の至つて近かりしより、相通ひしものあり。是は固より自然の法に基づき、今の如く人爲の法に由れるにあらず。余が本書に通韻の語を用ゐたるは、尋常詩家の用ゐるが如き限られたる義あるにあらず。

周時代の古韻につき、地を別にするに隨ひ、或は韻を異にするともありたるべしと思惟し、廣く詩經に見えたる、諸國の風に徵して、細かに檢したるに、其押韻の法に於いては、大差あるを認めず。本書は其の然るを示さんがため、特に多く諸國の風を引照せり。兩漢、三國漢、兩晉の時代に至りては、韻の變遷歷々として證あり。



此間諸州異同ありたるべしといへども、憾むらくは材料不完全にして、能く之を窺知るを能はず。本書の說く所は、只余が親しく接したる詩賦につき、其の考ふる所を述ぶるに過ぎざるなり。唐より以後は、韻の變化多く人の知る所なれば、其は略して論ぜず。余が研究の方面は、主として唐以前にありとす。

古韻を論ずるに當り、四聲を分けて、一々正すは、事煩雜に過ぐるを以て、之を避くるがため、平聲の韻の名稱のみを用ゐ、其中に上聲と去聲とをも包括せしめたり。例へば東の中に董、送、支の中に紙、寘、魚の中に語、御を含有せしめたるが如し。入聲は本邦人にも、區別明かなれば、平聲の下に置かずして、別に論ずるとせり。

古韻を原ぬるに、又一法あり。其は諸聲文字の組織を考究するとなり。諸聲文字とは、字畫の內、一部は音を示し、一部は義を示す、音義兼用の文字をいふ。江、河、鳩、鴿、園、圃の類是なり。音を示すといふ

は、意未だ足らず。其實は韻を示すなり。諧聲字の韻の基となる、獨立字即ち音標字を基字と名づく。韻は我假名にて表はせば、ア、イ、ウ、エ、オの母韻、若しくは其母韻に、ヌ(ン)ム、ン゛又ッ、チ、フ、ク、キの添はりたるものなり。諧聲字の中の基字即ち音標字は、韻を示せるのみにて、七音四聲の別に關係を有せず。七音とは唇、舌、牙、齒、喉、半舌、半齒の音をいひ、四聲とは平上去入の聲をいふ。七音の音は、我父音をいふ。是は普通の用法の如く、音韻合して一聲となりたるものゝ謂にあらず。

諧聲字の例（羅馬字は假に韻鏡に由り漢音に考へ合せて附したるものなり）

躬の基字弓は、平聲牙音にして、キュウ(kyung)なり。本字は同聲同音にして、基字と共にウ即ちウン゛(ung)の韻なり。

枝の基字支は、平聲齒音にして、シ(tshi)なり、本字は上聲牙音にして、ギ(gyi')なり、即ち基字に借りてィ(i')の韻なり。

答の基字合は入聲喉音にして、ガフ('ap)なり。本字は同聲舌音にしてタフ(tap)なり。基字本字共にアフ(ap)の韻なり。

帖の基字占は、平聲齒音にして、セム(tshem)なり。本字は入聲舌音にして、テフ(tep)なり。プ(p)はム(m)の入聲、故に韻はエフ(ep)なり。

妙の基字少は、上聲齒音にしてセウ(sheu')なり。本字は去聲唇音にして、メウ(meu')なり。其韻は即ちエウ(eu)なり。

松の基字公は、平聲牙音にして、コウ(kong)なり。本字は同聲齒音にして、ショウ(shong)なり。即ち基字本字共にオウ即ちオン゛(ong)の韻なり。

此の如き組織なるが、故諧聲字に由り、其の文字創作時代の韻を窺ふことを得べし。周の時代は、盛んに文字の製作せられし頃なりしと見え、諧聲字の韻と、詩經の韻と相一致すること多し。是は唯偶然の符合にあらざるなり。文字には同語に當てたるものにして、古今形の異なれるものあり。故に本書に比較に用ゐたる諧聲文字は、縱ひ上古の文字の韻ならずとも少くとも其諧聲文字製作

時代の韻を代表するとを記憶し置くべし。又古韻を解剖し、其所屬の文字を定むるに當り、只單に諸聲法の組織より押して判じたるものも多し。其中實際は、周以後の製作に拘はるものも、雜じり居るなるべけれど、其は細別しがたかりしに由り、其儘載せ置けり。又古韻を分ちて、其下に列記せる文字は、悉く其所屬のものを網羅せるにあらず、只通常多く見當る所の主なるものを擧げたるのみ。

漢字は元來形字にして、音字にあらず。昔し學者、音釋には他字を借りて音注を施したるが、後反切法の發明ありてより、音を解すると、主として此法に由れり。然るに發音は時代と共に變遷し、本字も、注字も反切字も、共に同時に轉化するが故、此等の法を以て、古音を窺ふと能はざるに至れり。古事記、書紀、萬用集等の我古書に於いて、地名人名物名等に當てゝ用ゐられたる漢字は、幸にして其音を保存せられ來りたり。たとひ其音は日本化せられたる所あり、又或は朝鮮化せられたる所もあるべしといへども、適當の解釋法を用ゐて、之を其元に還せば、支那當時の音を察すると を得るなり。我に漢音吳音の二種あり、漢音は洛陽長安の音、吳音は江南吳地の音として、專ら傳へ來られ居れど、是は尙精密の攷究を要す。分けて我古書に見えたる假名を、一概に、吳音と呼びて、人之を怪しまざるに至りては、却て大に之を怪しまざるを得ず。我古書の假名には、漢魏時代の音脈、遙かに通じ居れり。其上其頃に於いては、中原音と江南音とは、大差なかりしが如し。若し古史に見ゆるが如く我と支那との交通は、朝鮮を經て始まりしとせば、たとひ吳地と朝鮮と、海路の往來開け居りたるにもせよ、其傳來の支那音は、北音なるべきと、自然の順序なり。況んや我と魏晉との交通は、彼國の歷史も、明かに記載し置けるに於いてをや。

支那音韻の歴史に、大變化を與へたるは、晉末五胡の騷亂なりき。南北朝の時代となり、北音と南音とは、大に差異ありたるが如しといへども、憾むらくは、北朝の詩賦には、親しく接するを能はずして、之を探るに緣なかりしとを。陳隋も亦同樣にして、唐に至りて、始めて北音轉移の結果を窺ふとを得たるなり。詩賦韻書共に其韻の變遷を傳へ、梵漢對譯また其音を遺せり。然れども音韻を說くとの精密なるは、韻鏡に如く者なし。韻鏡の原音は、世之を知る者少し。余が解し得たる所を以て、之を古韻の研究に施し、得たる所甚だ多し。此書四聲を經とし、之を開、發、收、閉の四等に分ちて、二百六韻を配置し、七音を緯として。之を清、次清、濁、清濁の四類に分ち、一目して音韻を知るに便ならしむ。此二百六韻の分類法は、唐韻に基づきたるものゝ如し。韻鏡の解釋は、精細を要し、別論に屬するを以て、本書には之を載せず。現時の支那諸州の音の比較研究は、又音韻の問題に光輝を與ふる所多し。唐以後の音と、此等諸州の音との關係を探るは、是亦大問題なり。然れども、是は古韻考の範圍外に亘るを以て、本書は措いて論せず。

本書に風雅頌と記せるは、其の、詩經の詩歌たると、說明を要せざるべし。其三百篇は、遠く文王の頃より、孔子の時に至る、周代凡そ五百年の音韻を代表す。此間年月の長かりしに拘はらず、韻の變化に於いては、大差なかりしが如し。詩經と同時代、又詩經以前の詩歌、及び詩經以後戰國時代の詩歌につきては、多少窺知る所なきにあらざれども、余が手に入る所の材料不充分なるに由り、其は措いて論ぜざるとせり。左に詩經以外の古の詩歌につき、數例を出だし。之に今の韻を附して、古今の差異を示すべし。

皐陶歌

元首明。哉、肱股良。哉、庶事康。哉、

明(庚)と良(陽)と押韻。

南風歌

南風之薰兮、可以解吾民之慍兮、南風之時兮、可以阜吾民の財兮、

薰(文)と慍(問)と押し、時(支)と財(灰)と押す。

麥秀歌

麥秀漸々兮、禾黍油々兮、彼狡童兮、不與我好兮、

油(尤)と好(皓)と押韻。

晉童謠

鶉之賁々、天策焞々、火中成軍、虢公其奔、

賁焞奔(元)と軍(文)と押韻。

正考父鼎銘



一命而僂、再命而傴、三命而俯、循牆而走、亦莫余敢侮、

僂傴俯侮走(有)と押韻。

介子推歌

有龍矯々、頃失其所、五蛇從之、周遊天下、龍饑乏食、一蛇刲股、龍返於淵、安其壤土、四蛇入穴、皆有處所、一蛇無穴、號於中野、

下野(馬)と所(語)股土(麌)と押韻。

史蘇之占

不利行師、敗於宗丘、

師(支)と丘(尤)と押韻。

城濮輿人歌

原田每々、舍其舊而新是謀、

每(隊)と謀(尤)と押韻。

詩左傳成公九年に見ゆ。

雖有絲麻、無棄菅蒯。雖有姬姜、無棄焦萃。凡百君子、莫不代匱。

（蒯(卦)と萃(匱)と押韻。）

鄭人歌

我有子弟、子產誨之。我有田疇、子產殖之。子產而死、誰其嗣之。

（誨(隊)殖(職)嗣(異)押韻。）

趙鞅之占

是謂沈陽。可以興兵。利以伐姜。不利于商。

（兵(庚)と陽姜商(陽)と押韻。）

孔子去魯歌

彼婦之口。可以出走。彼婦之謁。可以死敗。

（謁(月)と敗(卦)と押韻。）

孔子丘陵歌

喟然廻慮。題彼泰山。蔚確其高。梁甫廻連。



（山(刪)と連(先)と押韻。）

孺子滄浪歌

滄浪之水清兮。可以濯我纓。滄浪之水濁兮。可以濯我足。

（濁(覺)と足(沃)と押韻。）

馮驩彈鋏歌

長鋏歸來乎。無以爲家。

（乎(虞)と家(麻)と押韻。）

荆軻易水歌

風蕭々兮易水寒。壯士一去兮不復還。

（寒(寒)と還(刪)と押韻。）

右の外、尙數多しといへども、其押韻法は、大體詩經と異なる所なきが故、先秦時代の韻論は、一に詩經に由らば、事足るならんかと推考せり。易經にも、一種の押韻法あれど、其法他と同じからざる

所あるが如し。故に其は古韻攻究の證例に用ゐず。詩の外には、多く楚辭を引照に用ゐたり。

本書に、韻の變遷を論ずるに當り、某時代に、某韻は、某韻に近づき、或は又某韻に轉ずと記せるは、今の其韻に屬せる文字の、一時に皆悉くまか爲せりと云ふ意にあらず。其中早く遷れるものもあり、晩く變はれるものもありたるは、事實なりしが如し。故に之に對して區別なく、韻の名を借用ゐたるは、只便宜上の用法なり。これ記憶し置くべき事なりとす。

韻を分つて、無尾有尾の二類と爲す。無尾韻は、支、微、魚、虞、齊、佳、灰、蕭、肴、豪、歌、麻、尤、にして、有尾韻は、東、冬、江、眞、文、元、寒、刪、先、陽、庚、青、蒸、侵、覃、鹽、咸、なり。本書は先づ無尾韻を論じ次に有尾韻に移るべし。

# 無尾韻の部

## 第一　歌と麻

古へ歌麻は、支微と魚虞とに通じたるとあり。

歌麻と支微と押韻の例。

### 鄘風

汎彼柏舟、在彼中河。髧彼兩髦、實維我儀。

### 衛風

瞻彼淇奥、綠竹猗々。有匪君子、如切如磋、如琢如磨。

### 王風

有兎爰々、雉離于羅。我生之初、尚無爲。我生之後、逢此百罹。尚寐無吪。

### 鄭風

蓼兮蓼兮、風其吹。女、叔兮伯兮、倡予和。女、

豳風

七月流火、八月萑葦。

小雅

或降于阿、或飲于池、或寢或訛。

同

彼何人斯、居河之麋、無拳無勇、職爲亂階、既微且尰、爾勇伊何、爲猶將多、爾居徒幾何、

階の字に關しては、支佳兩韻の關係後に說く。

大雅

涼曰不可、覆背善詈、雖曰匪予、既作爾歌。

魯頌

享以騂犧、是饗是宜、降福既多。



商頌

四海來假、來假祈々、景員維河、殷受命咸宜、百祿是何。

諸聲字の組織も、亦右兩類の同韻なるを示す。

| 基字 | 諸聲字 | 基字 | 諸聲字 |
|---|---|---|---|
| 皮 | 波 | 此 | 些 |
| 委 | 倭 | 衰 | 蓑 |
| 累 | 螺 | 垂 | 唾 |
| 多 | 移 | 可 | 奇 |
| 麻 | 麾 | 也 | 池 |
| 妥 | 綏 | 果 | 彙 |

歌麻と魚虞と押韻の例。

周南

翹々錯薪、言刈其楚、之子于歸、言秣其馬。

召南

于以奠之、宗室牖下。誰其尸之、有齊季女。

邶風

莫赤匪狐。莫黑匪烏。惠而好我。携手同車。其虛其邪。既丞只且。

衛風

投我以木瓜。報之以瓊琚。

鄭風

有女同車。顏如舜華。將翺將翔。佩玉瓊琚。彼美孟姜。洵美且都。

唐風

夏之日。冬之夜。百歲之後。歸于其居。

陳風

坎其擊鼓。宛丘之下。無冬無夏。值其鷺羽。

豳風

九月築場圃。十月納禾稼。

小雅

鴻鴈于飛。肅肅其羽。之子于征。劬勞于野。爰及矜人。哀此鰥寡。

同

祈父。予王之爪牙。胡轉予于恤。靡所止居。

大雅

是類是禡。是致是附。四方以無侮。

同

王遣申伯。路車乘馬。我圖爾居。莫如南土。

魯頌

有駰有騢。有驒有魚。以車祛祛。思無邪。思馬斯徂。

諧聲字の組織

基字　諧聲字





基字　諧聲字

者　諸　瓜　孤
乍　祚　夸　絝
吾　衙　予　野
余　斜　庶　遮

細かに歌麻の兩韻について、考察を下すに、今と古とは、其所屬の文字同じからざるものあり。古は歌の方にありし文字にて、今は麻の中に入りたるあり、又之と反對なるあり、其混同は中古兩韻の響の相近かりしとき、起りたるものゝ如し。今左に先秦時代の古韻を考へ合はせ、二類に屬せし文字を大別すべし。

歌の方

可阿何呵柯珂荷苛哥歌痾哿舸　我娥蛾鵝峩俄餓碪　加迦伽
賀笳、枷、茄、嘉、駕、架、珈　差磋傞嗟蹉瘥瑳嗟鎈　咼過鍋窩渦禍蝸
騧、撾、媧、　它佗沱陀駝柁、蛇、鉈　波坡頗跛婆破皺　麻魔摩磨麼

化、訛、吪、貨、花、囮　坐座挫剉　果祼課窠夥　羅蘿邏鑼　番播
皤　左佐　多哆、參　禾和科　那娜、沙、紗、娑莎　惰墮　戈　妥
瓦、儺、梭、蠃　火　瑣鎖　朵採　臥　些　蓑　也、他　唾
埵　馱　奈　箇

麻の方

叚、霞、葭、遐、瑕、蝦、假、暇　牙、邪、鴉、雅、芽、訝、迓　巴、葩、琶、芭、杷、把、射、謝
榭　者、奢、赭、闍　耶、爺、椰　家、嫁、稼　華、譁、韡　乍、鮓、詐　查、楂
寫、瀉　遮、蔗　舍、捨　亞、啞　斜、賒　茶　馬、禡、罵　夸、誇、胯　社
瓜　夜　下　赦　借、藉　叉　賈、價　冶　炙　嫫　若、惹
車　赦　衙　怕　霸　蛙、涯　夏、廈、寡

右の內、古韻の、今の韻と異なれるは、丶點を附して之を示せり。歌麻兩韻の內、歌は支微に通じ、麻は魚虞に通じたるを定則とす。加、嘉、駕、珈の四字、歌の韻に屬せし證。

鄭風

弋言加之、與子宜之、

豳風

既破我斧、又缺我錡、周公東征、四國是吪、哀我人斯、亦孔之嘉、

小雅

四黃既駕、兩驂不倚、不失其馳、舍矢如破、

鄘風

君子偕老、副笄六珈、委々佗々、如山如河、象服是宜、子之不淑、云如之何、

此の如く、支歌の韻所屬の文字と、押韻せるを以て、明ななり。加の類は總べて歌の韻なりと知るべし。

麻の字の、歌の韻に屬せし證。

齊風



東風之池、可以漚麻、彼美姬、可與晤歌、

池歌と押せるを以て、歌の方なりしなり。此字、古韻分類の名稱とすると固より穩かならず、是は只便宜上の用法と心得べし。

嗟の字の、歌の韻に屬せし證。

王風

丘中有麻、彼留子嗟、彼留子嗟、將其來施々、

施と押せるを以て、歌の方なりしなり。差の字も、今麻の韻に屬すれど、本來は左に從ふ字なれば、無論歌の方に置くを適當とす。

蛇の字の歌の韻に屬せし證。

小雅

吉夢維何、維熊維羆、維虺維蛇、

化の字の、歌の韻に屬せし證。

屈原離騷經

初旣與余成言兮、後悔遯而有他、余旣不難夫離別兮、傷靈脩之數化、

固時俗之從流兮、又孰能無變化、覽椒蘭其若茲兮、又況揭車與江離、

花は麻の韻に屬すれど、此字晉以前の書には見ると稀なり。之を華に通じて用ゐたるは、後世の事なり。故に疑問と爲すに足らず。化の類は總べて歌の方と心得べし。

瓦の字の、歌の韻に屬せし證。

乃生女子、載寢之地、載衣之裼、載弄之瓦、無非無儀、唯酒食是議、無父母詒罹、

沙の字の、歌の韻に屬せし證。

鳧鷖在沙、公尸來燕來宜、爾酒旣多、爾殽旣嘉、公尸燕飲、福祿來爲、

紗も沙、娑、莎と同韻なりしなるべし。此等の諸字は、少の聲に從ひて生ぜし字なるが故、歌の方に屬したるべきと、疑ふまでもなし。

(少は蕭の韻に屬す、此韻後に論ず)

朔の字、前漢の初期、韋孟が諷諫の詩に、過の字と押したる例あり。

興國救顚、孰違悔過、追思黃髮、秦繆以霸、

是に由りて考ふれば、先秦の時代には此字或は歌の方なりしかとも思はる。

也の字、今は麻の方に屬すれど他、跎の基字、又池、地の基字となるを見れば、歌の方なりしなるべし。

巴の字、肥、又巵の基字となるが如く見ゆれど、未だ確かならず。又同類の字の、支、歌の韻に通じたる例を見ざるが故、姑く麻の方に定む。

耶も、耳は其基字なるべければ、歌の韻なりしならんか。此字玉篇に俗の邪の字とあるを見れば、後世の作字なるべし。

鞞の字は、華の聲に隨ふ。故に此字今歌の方にあれど、本來は麻の

方なりしなるべし。此字また靴にも作る。韡は或は歌麻相通の時代の作字にや。

箇は、固の聲に隨ひて生ぜし字なるべし。然らば古韻は魚虞に緣ありし麻の方なりしならんが、未だ確證を得ざるが故、其儘歌の方に記入し置けり。

蛙涯の如く、支佳の韻に通ずるものは、本來は歌の方にあるべかりし筈なり。

是より年代を逐ひて、歌麻兩韻の變遷を說くべし。

屈原離騷經

朝吾將濟於白水兮、登閬風而緤馬。忽反顧以流涕兮、哀高丘之無女。

同漁父辭

世人皆濁、何不淈其泥而揚其波。世人皆醉、何不餔其糟而歠其醨。

宋玉招魂

仰觀刻桷畫龍蛇。些、坐堂伏檻臨曲池。些、

同

二八齊容起鄭舞。些、衽若交竿撫案下。些、

秦琅邪臺刻石

功蓋五帝、澤及牛馬、莫不受德、各安其宇。

三略

柔有所設、剛有所施、弱有所用、彊有所加。

賈誼弔屈原文

恭承嘉惠兮、俟罪長沙。側聞屈原兮、自沈汨羅。

沙は羅と押し、羅は歌の韻に屬せり。

劉安招隱士

狀貌嵯峨兮、峨峨。凄凄兮、滋滋。

牧乘七發

沌々渾々狀如奔馬、混々庖々聲如雷鼓、

司馬相如子虛賦

微熾出纖繳施、七白鵠連駕鶩、雙鶬下玄鶴加、怠而後發游於淸池。

加の字の押韻法三略に同じ。

東方朔七諫

蓬艾親入御于牀第兮、馬蘭踸踔而日加、棄捐葯芷與杜衡兮、余奈世之不知芳何、

明かに加は猶歌の韻に屬せり。

司馬相如上林賦

覽觀春秋之林、射貍首兼騶虞、弋玄鶴干戚、載雲罕掩羣雅、

大史公自序

依之違之、周公綏之憤發文德、天下和之、

以上は、歌は支微に通じ、麻は魚虞に通じたる例なり。歌麻相通じたる例、尙甚だ稀なり。降りて前漢の末期、楊雄が時代に於いて、尙歌と支との押韻を見る。

楊雄長楊賦

夫天兵四臨、幽都先加、廻戈邪指、南越相夷、靡節西征、羌僰東馳、然るに楊雄と程遠からざる時代の班彪の賦に於いて、左の如き押韻あり。

班彪北征賦

惟太宗之蕩々兮、豈曩秦之所圖、隣高平而周覽兮、望山谷之嵯峨、野蕭條之莽蕩、迥千里而無家、風猋發似飄颻兮、谷水灌以揚波、

圖(歌)と家(麻)と峨波(歌)と押韻。

是より後は、歌麻相通じて、共に魚虞と押すを多く、前の如く、歌の支と押すと、漸く迹を藏せるが如し。是は主として、歌の其響を變

じて、麻に近づけるに由りしなるべし。

班固幽通賦

溺招路以從巳兮、謂孔子猶未可。安慆々而不苑兮、卒隕身乎世禍。
遊聖門而靡救兮、雖覆醢其何補。

可(歌)と補(虞)と押韻。

傳毅舞賦

貌嫽妙以妖盡兮、紅顏曄其揚華。眉連娟以增繞兮、目流睇而横波、

華(麻)と波(歌)と押韻。

張衡西京賦

若夫翁伯濁質、張里之家。擊鐘鼎食、連騎相過。東京公侯、壯何能加。

家(麻)と過加(歌)と押韻。

馬融長笛賦

泣血泫流、交横而下。通旦忘寐、不能自禦。



下(麻)と禦(魚)と押韻。

王延壽魯靈光殿賦

乃立靈光之秘殿、配紫微而爲輔。承明堂於少陽、昭列顯於奎之分野。

輔(虞)と野(麻)と押韻。

後漢の班昭又曹昭は、其號を曹大家といへり。家讀んで姑と作すとあるを見れば、和帝の時代には家と姑と通じ居りたるを知るべし。

魏の時代に入りてより、麻は魚虞と押したると、至つて稀なり。偶〻其例あるも、或は殊に古韻に擬したるものゝ如し。則ち魏の時代より、麻は魚虞の伴侶を脱して、歌に近づき、是より歌麻兩韻同盟一致の姿を執れるなり。兩韻所屬の文字、相往來して、其位置を換へたるとありしは、重に此時代より始まりしが如し。是より歌

の支微に通じ、麻の魚虞に通ぜしは稀にして、而して歌麻兩韻は共に相押すを常とせり。其例左の如し。

陳琳武庫賦

千徒縱唱、億天求和。聲匍隱而動山、光赫奕以燭夜。

曹否寡婦賦

風至兮清厲、陰雲曀兮雨未下。伏枕兮忘寐、逮平明兮起坐。愁百端猥來、心欝々兮無可。

曹植洛神賦

遠而望之、皎若太陽升朝霞。迫而察之、灼若芙蕖出綠波。

稽康琴賦

怫愲煩寃、紆餘婆娑。陵縱播逸、霍濩紛葩。

潘岳河陽縣作

歸鴈映蘭時、游魚動圓波。鳴蟬厲寒音、時菊耀秋華。

依水類浮萍、寄松似懸蘿。朱博糾舒慢、楚風被琅邪。曲蓬何以直、託身依叢麻。黔黎竟何常、政成在民和。

左思蜀都賦

干青霄而秀出、舒丹氣以爲霞。龍池濕瀑濆其隈、漏江伏流潰其阿。

此句の上に、爵盞苴以翠微。崑巍々以峨々。と、微。と峨。と押したる例あり。然れども。此時代に於いては、此用法古韻に擬したるものと見る方、穩當なるべし。

劉琨答盧諶詩

咨余軟弱、弗克負荷。愆釁仍彰、榮寵屢加。威之不建、禍延凶播。忠隕于國、孝愆于家。

陶潛挽歌

千年不復朝、賢達無奈何。向來相送人、各已歸其家。

同命子詩

既見其生、實欲其可。人亦有言、斯情無假。

謝惠連雪賦

於是阿海生雲。朔漠飛沙。連氛累霰。掩日韜霞。霰淅瀝而先集。雪紛糅而遂多。

王僧達祭顏光祿文

登朝光國。實宋之華。才通漢魏。譽決龜沙。服爵帝典。樓志雲阿。清交素友。比景共波。

沈約安陸昭王碑文

塗由帝渚。朱軒靡駕。東首塋園。卽宮長夜。逝川無待。黃金難化。鐘石徒刊。芳猷永謝。

張纘瓜賦

納佳種於畦畹。應時運而剖牙。揮萠散孽。裁葉負柯。

飜つて更に歌麻の古韻の性質を考ふべし。

皮を聲とせる諸聲字に、陂、疲、披、彼、被と波、坡、頗、跛、破との二類あり。

我漢音に從へば、一はヒ(pi)にして支の韻に屬し、一はハ(pa)にして歌の韻に屬す。此古音はヒにもあらず、ハにもあらず、其中間にして、双方共にヘ(pe)に近き音なりしなるべし。古へ同韻なりし支微と歌は、余は其聲をエの類なりしと判定す。我古書にても衣、依をエ、氣、祁、希、既をケ、宜、擬をゲ、施をセ、是をゼ、尼をヂの假名に用ゐたるが如きは、固より十分精確の憑據とは爲しがたしといへども、亦以て支微の韻にエの響のありたるを察し得べし。

麻は魚虞に通じたるを以て、其古韻はウ又オの類なりしなるべし。其聲拗音にして、ㇰ又ㇱの類なりしかと思はるゝ所あり。

歌はエより次第にアの方向に進行き、後漢の初期の頃に至り、オ(o)に近き韻となりたるか、支微を離れて、麻に近づき、魚虞とも通じたるなり。然るに麻は拗音にて、次第にヤ(ya)に近き韻となりて、魚虞と分れ同時に歌は直音にて、ア(a)となり、魏の時代に至りて、

歌麻相合し、進んで六朝の頃に至りても、兩韻尚親密の關係を保てり。後漢の張衡が賦に支歌兩韻の關係、余が說と反するが如く見ゆる例あり。

張衡思玄賦

天地絪縕、百卉含葩、鳴鶴交頸、雎鳩相和、處子懷春、精窻回移、如何淑明、忘我何多、

葩(麻)と和多(歌)と移(支)と押韻。

麻と支と押したるはいかゞ。又既に張衡が時代に於いては、歌と支と押したるも、訝しく思はるゝ所あり。移の字我古書には、ヤの音に當てたるとあり。此字異なりたる音ありしに由りて、前の如き通韻となりしか、然らざれば、此移の押韻法は、古韻の用法に擬したるものなるべし。

晉の左思が賦に、微と歌と押韻の例ありたるは、前に示したるが、尙外にも同類の例、見當るとあり。

盧諶贈劉琨詩

五臣奚與、契闊百離、身經險阻、足踏幽遐、義由恩深、分隨昵加、綢繆委心、自同匪他、

此離の字も亦擬古の用法と見るより外なし。

黃庭經

丹青紫條翠靈柯、七蕤玉籥閑兩扉、

古は可の類の、非の類と押したると、絕えてなかりしといふも可なり。然れども東晉の頃にては、柯扉の押韻は、自然ならざるべし。これ黃庭經の原書の其年代より古かりしを示すに當るなり

道藏歌は、余未だ其時代を詳かにせずといへども、其押韻法より考ふるときは、魏晉の間の作なりしが如し。余は其の、晉代の作なるべきを信ず。然るに其中に歌と魚虞との押韻あり。

五道息對魂、九幽罷三途、不聞孤魂聲、但聞樂與歌、

又

宴景玉京上、遊輪蹲玄都、道遙大明中、長鐙煥翠羅、

陸雲が作にも亦此押韻あり。

陸丞相誄

改容肅至、傾蓋寵步、鞶帶鏘紛、珍裘阿那、

右は異例なり、是は或は押韻法の精確ならざるに由りたるなるべし。

麻と魚虞と押したる例も、魏以後稀には見當るとあり。

道藏元君詩

披雲泛靈輿、倏忽適下土、崆峒滅玄雲、至感不容冶、

齊武帝估客樂詩

昔經樊鄧役、阻潮梅根冶、深懷悵往事、意滿辭不叙、

冶の字は、他に後れて、麻に移りしか、否、其の然らざらし證あり。

謝惠連詩



鄙生無文章、西施整妖冶、胡爲空耿介、悲哉君志瑣、

これ此時代に普通なる、歌麻相通の例なり。因りて前二例の破格なるを知るべし。

陸雲歲暮詩

揮促節於短日兮、振脩策於長夜、運悠々其既周兮、歲冉々而告暮、

夜の字は魏の陳琳が賦に、既に和の字と押せり。

左思吳都賦

横塘查下、邑屋隆夸、長于延屬、飛甍外亙、

夸の字は、同時代の陸機感丘賦には、婆の字と押したる例あり。

魏以後は、麻と魚虞と押韻の例は、甚だ少數なれば、寧ろ自然の押韻と見ざる方適當なるべし。或は作者の生地に因りて右の如き異同ありたるかも知るべからず。唐人の詩にも、折々同樣の押韻法ありしを見る。

韓退之元和聖德詩

經戰代地、寛免租簿、施令酬功、急疾如火、

是は擬古躰にあらざれば、中唐以來、歌の韻の變化の生じたる後の作と見做すべきか、然らざれば、漢魏時代の音脈、地方の鄉音として、遙かに通じ居りたるものと考ふべし

歌麻押韻の例も亦唐人の詩に見受くるとあり。

白樂天效淵明體詩

所以陰雨中、經旬不出舍、始悟獨住人、心安時亦過、

麻の韻は、我には、ヤよりエに近くきこえたるか、我古書に、多くエの聲に寫せり。即ち家價をケ夏下牙をゲ霸をヘ馬をメの假名に用ゐたるが如し。尤も今厦門にては、拗音を用ゐず、直音にて、我假名の如く、ケ(ke)ゲ(ge)ヘ(he)メ(me)等と呼ぶとあり、然れども、此厦門音も細かに探らば、本或は拗音より轉じ來りたるものなるかも未だ知るべからず。

左に現今の官話と、江南音と、廣東音とに由りて、麻の韻を比較す。

| | 官話 | 江南音 | 廣東音 |
|---|---|---|---|
| 家 | キヤ (kya) | キヤ (kya) | カ (ka) |
| 牙 | ヤ (ya) | ヤ (ya) | ガ (nga) |
| 下 | ヒヤ (hya') | ヒヤ (hya') | オ (o') |
| 巴 | パ (pa) | パ (pa) | ポ (po) |
| 馬 | マ (ma') | マ (ma') | モ (mo') |
| 茶 | チヤ (ch'a) | ヂヤ (ja) | ヂヨ (jo) |

羅馬字にて、拗音をiaともyaとも記す。余は下の記法を取れり。

右の類、官話は拗音にして、廣東音は直音なるを定則とす。官話にて、唇音パ、マの類に、直音あるは、拗音ピヤ、ミヤの類の轉じたるなり。古韻の反切法、能く之を證す。廣東音にも、舌音と齒音とには拗音あり。江南音に、二種を出だしたるは、上は上海音にして、下は蘇

州音なり。寧波杭州の音は、上海音に類似せるが如し。上海音は拗音なると官話に似、蘇州音は直音なると廣東音に似たり。

我漢音にては、麻の韻は直音にして、シャとチャと其濁音のみは拗音なると、廣東音に類せり。吳音は拗音の轉化なるべきと、前にも述べたるが如し。其原音は今の官話或は上海音の類と見て大差なかるべし。吳音と漢音とを相比すれば、前者は後者より古かりしと、證左多し。故に漢音、廣東音、蘇州音の麻の韻は、拗音より直音に轉じたるものと見て可なり。尤も本邦人は、拗音を嫌ひ、特に之を直音に變へたる例もあれば漢音の原音は、一概に直音なりしともいひがたし。蘇州音にォの韻あるはいかに。余は前に漢魏の時代に於いて、麻の韻の、拗音の形にて、オよりァに移りたるを論ぜり。故に蘇州音には、古韻の存じ居るものと見做すべきか。然らざれば、後世に於て、ァは却てオに轉じたるものと爲さゞるを得ず。

後漢書に、我大和を邪馬臺と記せるを見れば、劉宋の頃には、馬は既にァの音にて直音なりしが如し。然れども、唇音の拗音は、直音に聞こえ易き例あるが故、未だ以て確しかなる證と爲すと能はず。唐の代に至りて、邪馬臺を邪摩推と爲し、麻の韻の上聲なる馬を、歌の韻の平聲なる摩に改めたるを見れば、此兩字啻に上聲と平聲との差のみならず、其韻の響にも異なりたる所ありたるなるべし。唐朝の詩家の作につき、試に探正しゝに、歌麻の押韻は、稀に見る所なり。故に兩韻の間に、區別のありたるべきと明かなり。今エーテル氏の梵漢對譯を引き、歌麻兩韻の性質を窺ふべし。

| | | |
|---|---|---|
| 阿彌陀 | アビダ、 | Abida |
| 波羅密多 | パラミタ | Pâramitâ |
| 摩訶邪那 | マハヤナ、 | Mâhâyâna |

| | | |
|---|---|---|
| 娑婆 | サハ | Saha |
| 釋迦 | シヤキヤ | S'akya |
| 毗沙拏 | ビチヤナ | Vichana |
| 夜叉 | ヤチヤ | Yakcha |
| 般若 | パニヤ | Panya |
| 舍利 | シヤリ | S'ari |
| 伊沙馱羅 | イチヤダラ | Ichadara |

右の内、阿、陀、波、羅、多、婆、婆、馱は歌の韻に屬し、迦、沙、拏、叉、若、舍は麻の韻に屬す。歌の韻は、アの聲にして、直音なりしと疑なし。麻の韻も亦アの聲にして、拗音なりしが如しといへども、直音も共に混じ居りたるが如く見ゆ。借音には、樣々の寫し方あるが、故、麻の果して拗音のみなりしか或は直音の混じ居りしか、對譯のみにては十分之を判じ難し。右の梵漢對譯に見えたる歌麻兩韻の音は、我漢音と能く相類似す。

唐時代に在りては、歌麻兩韻は、前の如く往來せざりしを見れば、此兩韻の別は、只單に直音と拗音の差異のみにはあらざりしが如し。意ふに歌の方は、其韻ァの延びたる聲にて廣長音のァーの如くきこえ、後には現今支那諸州に於いて、見るが如き、オー又オの聲に轉じたるならんか。

晩唐時代の著作なりといふ、韻鏡を檢するに果の下に二十七轉の歌と、二十八轉の戈との、開合兩類ありて、內轉に屬し、一等のみに位するを見れば、兩者共にオの直音なりしことを證す。又假の下には、二十九轉の麻と、三十轉の麻との、開合兩類ありて、外轉に屬し、一等の欠位なるを見れば、兩者共にァの聲はあれど、直音ならずして、拗音なりしことを示す。二等三等に位するものは拗音なり。四等は直音なれども、アの聲にあらずして、ェの聲なりしが如し。

是に由りて考ふるに、韻鏡にては、歌・麻の兩韻、其音今の官話、又上海音に粗相類せしが如し。尤も韻鏡は、江左の音に基づきて、作りたるものなりといへば、之を以て一概に當時の洛陽長安の北音を判じがたきは、記憶し置くべき事なりとす。

今の支那音(官話)に、歌・の韻の、オの聲なると、左の例の如し、

河　一ホ　(ho)　柯　コ　(ko)
波　ポ　(po)　破　ポ　(p'o)
蓑　ソ　(so)　左　ソ　(tso)
多　ト　(to)　我　ヲ　(wo)
磨　モ　(mo)　羅　ロ　(lo)

歌・麻・兩韻の變遷を約言すれば、歌・は始は支・と共にエの韻なりしが、後漢の初期に於いて、其響を變じ、次第にアの方向に進み、中頃より麻・と接するに至れり。麻・はウ或はオの韻を以て起り、魚・虞・と一致して、後漢の末期、或は魏の初期に至り、爰に始めて其伴侶を脱して、アの韻に移り、歌・と相結んで、相往來せり。而して歌・は直音にして、麻・は拗音なりしが如し。唐の時代に至りて、親密の關係破れ遂に兩韻互に獨立し、其後歌・はオの韻となりたるなり。

尚爰に一言を殘し置くべきとあり。人或は入聲字の諸聲法に由り、麻・の古韻の、エなりしといふを疑ふ者あらん。今其例を擧ぐべし。

借　此基字昔は吳音ジヤク漢音セキ。
赦　此基字赤は吳音ジヤク漢音セキ。
怕　此基字白は吳音ビヤク漢音ハク。
惹　此基字若は吳音ニヤク漢音ジヤク。

右の如く、入聲基字の音より推せば、借・赦・はジヤ或はセ、怕・はビヤ或はハ、惹・はニヤ或はジヤの音にて、皆アの或はエの韻なるが故、オ

とは稍遠きが如し。これ疑の生ずる所なり。然れども、是は入聲字の古音を、吳音或は漢音に取れるより、誤解の起れるなるを悟らざるべからず。例へば昔の古音はジャク又セキにあらざりしは、昔を聲としたる文字措錯醋の如く、ソの音あるを見ても明かなり。他も皆推して察すべし。作は入聲はサクにして、乍はサなれど、祚はソなり著は入聲はチャクなれど、去聲はチョなり。其同族字に者奢闍の類もあれば、諸暑都の類もあり。古音は決して、入聲字の吳音漢音などより、判斷するを能はざるなり。

## 第二、支微齊佳灰

右五韻の、古へ相通じたりしは、詩の諸篇之を證して餘あり。

周南

葛之覃兮、施于中國、維葉萋萋。黃鳥于飛、集于灌木、其鳴喈喈。

召南

江有汜。之子歸、不我以。不我以、其後也悔。

邶風

終風且霾、惠然肯來。莫往莫來。悠々我思。

鄘風

相鼠有體。人而無禮。人而無禮、胡不遄死。

衛風

手如柔荑。膚如凝脂。領如蝤蠐。齒如瓠犀。螓首蛾眉。

小雅

習々谷風、維風及頹。將恐將懼、寘予于懷。將安將樂、棄予如遺。

大雅

于疆于理。至于南海。

周頌

豐年多黍多稌、亦有高廩。萬億及秭。爲酒爲醴。烝畀祖妣。以洽百禮。

降福孔皆。

諸聲字の組織。

| 基字 | 諸聲字 | 基字 | 諸聲字 |
|---|---|---|---|
| 是 | 提 | 斯 | 嘶 |
| 尼 | 泥 | 兒 | 鯢 |
| 非 | 排 | 里 | 埋 |
| 市 | 沛 | 此 | 柴 |
| 畏 | 隈 | 隹 | 堆 |
| 矣 | 挨 | 鬼 | 魁 |
| 台 | 治 | 犀 | 遲 |
| 麗 | 鸝 | 惠 | 穗 |

支。微。齊。隹。灰。の相通じたるは、魏晉の頃までは、尙普通の事柄なりしが如し。左に其例を示すべし。



秦琅邪臺刻石、

日月所照、舟輿所載。皆終其命、莫不得意。應時動事、是維黃帝。

賈誼鵩鳥賦

請問于鵩、余去何之。吉乎告我、凶言其災。淹速之度、語余其期。

太史公自序

維昔黃帝。法天則地。……帝堯遜位。虞舜不台。

古詩

西北有高樓、上與浮雲齊。交疏結綺窻、阿閣三重階。上有絃歌聲、音響一何悲。誰能爲此曲、無乃杞梁妻。淸商隨風發、中曲正徘徊。一彈再三歎、慷慨有餘哀。不惜歌者苦、但傷知音稀。願爲雙鳴鶴、奮翅起高飛。

班彪北征賦

飛雲霧之杳々、涉積雪之皚々。鴈邕々以羣翔兮、鵾鷄鳴以嚌々。遊

子悲其故鄉兮、心愴恨以傷懷。撫長劒以慨息兮、泣漣落而霑衣。

馬融長笛賦

惟鍾籠之奇生兮、于終南之陰崖。託九成之孤岑兮、臨萬仞之石磎。特箭栗而莖立兮、獨聆風於極危。秋潦漱其下趾兮、冬雪櫑封乎其枝。巔根跱之槃朏兮、感迴飈而將頹。

應瑒侍五官中郎將建章臺集詩

朝鴈鳴雲中、音響一何哀。問子游何鄉、戢翼正徘徊。言我塞門來、將就衡陽棲。往春翔此土、今冬客南淮。遠行蒙霜雪、毛羽日摧頹。常恐傷肌骨、身隕沈黃泥。簡珠墮沙石、何能中自諧。欲因雲雨會、濯翼陵高梯。良遇不可值、伸眉路何諧。公子敬愛客、樂飲不知疲。和顏既以暢、乃肯顧細微。贈詩見存慰、小子非所宜。爲旦極歡情、不醉其無歸。凡百敬爾位、以副飢渴懷。

陸機擬古詩



西山其何峻、曾曲蔚崔嵬。零露彌天墜、蕙葉憑林衰。寒暑相因襲、時逝忽如頹。三閭結飛轡、大臺嗟落暉。

晉より降りて宋齊梁に遷進むに隨ひ、五韻の關係前の如く親密ならず。支微は次第に分れ、齊佳灰も亦獨立せんとしたる傾向見えたり。此間齊佳灰の通韻に用ゐられしとき、微は支より之に近かりしと見え、尙折々之に伴ひたるとあり。

謝惠連擣衣詩

衡紀無淹度、晷運忽如催。白露滋園菊、秋風落庭槐。肅々莎雞羽、裂々寒蟲啼。夕陰結空幕、宵月皓中閨。美人戒裳服、端飾相招携。簪玉出北房、鳴金步南階。櫚高砧響發、楹長杵聲哀。微芳起兩袖、輕汗染雙題。紈素既已成、君子行未歸。裁以笥中刀、縫爲萬里衣。盈篋自余手、幽緘候君開。腰帶准疇昔、不知今是非。

鮑昭放歌行

蓼蟲避葵堇、習苦不言非。小人自齷齪、安知曠士懷。雞鳴洛城裏、禁門平旦開。冠蓋縱横至、車騎四方來。素帶曳長飈、華纓結遠埃。日中安能止、鐘鳴猶未歸。

齊梁の人、謝朓、范雲、江淹、沉約などの詩に至りては、此の如き通韻を見ると割合に少し。支微の齊佳灰と、緣を絶つに至りたるは、其響の間に、離隔の生じたるに源由せしとなるべし。齊佳灰は、尙關係を存じ居りたるが、其の互に全く獨立するに至りたるは、唐以前の事なりしが如し。唐に入りては、齊は獨用、佳と皆と兩韻ありて同用、又灰と咍と兩韻ありて、是も同用なりしが、齊佳灰の三韻は、相通はざる樣になれり。

前に既に、支微の歌と相通じたる古韻を以て、エの韻なりと斷定せり。今又支微の齊佳灰と通じたるを見るにつき、益〻其推考を確かむる所あり。我古書の假名遣も、亦之に符合す、即ち衣、依、曳、叡、哀、埃、愛をエ、氣、祁、希、既、計、奚、啓、稽、開、階、戒、該、慨をケ、宜、擬、霓、皚をゲ、施、世、勢、齊、制、西、細をセ、是、筮をゼ、底、帝、堤、弟をテ、泥、耐、代、題をデ、禰、尼、泥、をネ、閉、敝、陛、珮、皆、沛、杯をヘ、倍をベ、米、每、賣、昧をメ、惠、衛、回、隈、會、穢をエに當てたる、皆以て其證を强むるに足れり。同類にて、イの韻に用ゐたるもあれば、素より是を以て、十分の證とは見做しがたしといへども、我古書に用ゐられたる漢字の音には、少くとも古音の存じ居りたるを窺知るとを得べし。

支微の兩韻、其區別、今尙明かならず。韻鏡を以て比すれば、之を說明するに聊か考說ありといへども、事此書の問題外に亘るが故、措いて論ぜず。晉以後齊佳灰の、支と分るゝに至りたるは、其三韻のエイよりアイに移行きたるに由るなるべし。又微の、其後尙齊佳灰と通じたるとありしは、支に比すれば、其韻の響の稍長かりしに由りたるならんか。我古書に就きて正すに、同一の漢字に、種

々の音ありて、通例吳音と唱へ來られたるものゝ中に、其實は漢魏時代の音なりしが如く思はるゝものあり。前に出だしたる例の如く、愛をエ、開をケ、西をセ、希をケ、是をゼといふ類是なり。六朝の中頃よりは、佳灰は、我漢音のアイに近づき、齊も亦之に類似の韻となりたるが如し。即ち西をサイ、米をマイ、弟をダイ、禮をライといふ類なり。是即ち江南音にして、當時の純粹の吳音なりしなり。此音大に我國に行はれ、題をダイ、體をタイ、妻、細、祭、際、歲をサイと讀み、之を漢音の中に混じて、人多くは怪しまざるに至りしは奇なりといふべし。今の廣東音は尙此音なり。廣東にては、齊佳の兩韻にはアイ、灰の韻にはオイを當つるを定則とす。又啻に之のみならず、爲章をワイ、規鬼をクワイといふが如く、支微の韻の合口呼の文字にも、屢々アイの響を與ふるとあり。

然るに爰に稍不審に思はるゝ所のものは、其頃我國に佛書と共に渡來せし支那音には、兄弟をキヤウダイ、弟子をデシと讀むが如く、同じ弟の字に、ダイとデとの二樣の讀方ありて、齊の韻には、エとアイと并び用ゐられしのみならず、佳灰にもエとアイと共に存じ、又支微にもエの混じたるとなり。これ或は兩音傳來の時代の異なりたるものか、左なくば變遷過渡の期に際し、同時代に兩音の并び存したるものなるかも知るべからず。今の蘇州上海邊の音にては、齊の韻はエに近く、佳灰の韻はアイに近きが如し。齊の韻をアイと呼ぶは、今厦門廣東の邊に殘り、佳灰の韻をエと呼ぶは、諸州に殆ど其迹失せたるが如し、只上海邊には尙之に類似の音あり。支微の合口呼には、今も尙ウエイの響を與ふる處多し。此の如く、韻の變化自ら經歷あり。之を別に意に介せず「帝」をテ、「禮」をレ、「西」をセに用ひたるは、漢音のティ、レイ、セイなどを取れるに非ず、吳音のタイ、ライ、サイにして、「愛」をエ、「開」をケ、「米」をメに用ひ

たると同格なり」などゝ、例の、五十音反切法の、人爲の變化の如く心得て、恬として怪まざる者は、未だ語學の研究法を辨へたる者といふべからず。

隋の煬帝を、ヤウダイと呼ぶは、吳音なり。然れども、是は隋人の音なりしや否や、詳かならず。唐時代にありては、齊の韻は、エ又エイなりしと疑なし。北朝の音にては、齊の韻は、エよりアイに移らざりしに由りて然るか。梵漢對譯にて、提婆犀那はダイバサイナにあらずして、ディバセイナなるも其一證なり。其證、尙外に數多ければ、此處に記載する必要なかるべし。此韻、又支微の如く、イの聲となれるともあり。佳灰はアイなり。今の官話は、これなり。然れども尙細かに探れば、其別ありしなり。韻鏡には、佳と皆との別ありて崖、媧、娃、蛙、釵、柴の類は佳に屬し、排、埋、諧、懷、乖、匯、齋、豺の類は皆に屬せり。而して皆は灰(咍)と相對し、灰(咍)は一等、皆は二等にて、直音と拗音との差ありしなり。正韻にては、皆を韻の名稱と爲し、佳の類を其中に置けり。今は之に反し、佳を韻の名稱と爲し皆の類を其中に置く。平聲の佳に對する去聲には、韻鏡にも今の分類法にも、泰と卦との兩韻を置く、是直音と拗音との別なり。

今左に實例を出だし、今の官話、江南音、廣東音に由りて、佳灰皆の三韻を對照し、而して其別を明かにすべし。

| | 官話 | 江南音 | | 廣東音 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 佳(佳) | キャイ (kyai) | キヤ (kya) | カイ (kai) | | |
| 懈(卦) | キャイ (kyai) | カ (ka') | カイ (kai) | | |
| 大(泰) | タ (ta') | ダ (da') | タイ (tai') | | |
| 賴(泰) | ライ (lai') | ラ (la') | ライ (lai') | | |
| 哉(灰) | サイ (tsai) | サエ (tsae) | ソイ (tsoi) | | |
| 胎(灰) | タイ (t'ai) | タエ (t'ae) | トイ (t'oi) | | |

諧(皆)ヒヤイ (hyai)、ヒヤエ (hyae) ハイ (hai)

懈の江南音はキヤ(kya)其本音なるべし。

官話にては、佳皆同韻にて、灰とは拗音と直音との別なり。泰には灰と同形なるものもあり、又然らざるものもあり。江南音にては、佳は他と別韻にして、其去聲泰と卦とには直音拗音の別あり灰と皆とは同韻にして、又直音拗音の別あり。廣東音にては、佳と皆と、佳の去聲卦と泰と皆同形なり。灰には響の稍異なれる所あり。以上の比較を以て推すに、韻鏡の音は、粗今の江南音に類したるものゝ如し。正韻は今の韻と類別同じきを以て、明時代の音と官話とは、大差なかりしを知るべし。廣東音に至りては、韻鏡著作の時代より遙かに遠かりし、南北朝の末期の頃の音の遺物なりしやも知るべからず。我漢音にては大はタイ、賴はライにして、其音廣東音に同じく、未だ江南音の如く、韻末のイを省きたる例あらず佳は漢音カイにて、是も亦廣東音の如く直音なり。此字また韻末のイを省きて、カの音もあり。佳の韻の文字、屢〻歌の韻に通じたるは、唐人の詩に其證例多し。按ずるに、此時代佳灰兩韻の別は佳は灰に比し、其響の輕かりしに在るが如し。尚唐韻廣韻につき反切を考ふるに、佳皆灰の三韻各〻別あり。故に唐時代の音は、全く我漢音若しくは今の廣東音に一樣なりしとは斷言すると能はず。分けて我國にては、拗音を嫌ふ傾向あれば、キヤイ、チヤイの如きは、故意にカイ、タイ又サイと寫したるかも期しがたし。支微齊佳灰の變化を約言すればエよりエイに移り、支は先づ分れ、次に微は脱し、エイよりアイに進むに隨ひ、齊は其仲間を出で、佳灰は殘りて後更に分離したるなり。

## 第三　支と尤 微齊佳灰は支に准ず

灰の古韻はエなるべきと、既に述べたるが如し。倍陪のベとなる

より、自然に聯想の推及ぶは、忌部、物部などゝ、べに當てたる部の字なり。是は疑もなく、義字にあらずして、音字なり。音は倍陪の音字なれども、又部剖の音の基ともなる。部剖共に今は虞の韻にも、尤の韻にも屬すれど、古は倍陪と同韻なりしと論を俟たず。而して倍も部も、共にべの假名に當てたるを見れば、倍陪、部剖の音を基と爲したる類の文字、其古音べなりしなるべし。因りて古は今の灰尤兩韻に屬する文字に、互に緣故ありたるを知るべし。某謀と、煤、媒、楳とは、また部と倍との如き關係あり。某は說文には酸き果、玉篇には古の梅の字なりとあり。康熙字典には某は其本字にて俗に某に作るは非なりとあり。此說に從へば、ソレガシの義の某は別字なり。某は本は厶に同じく、我片假名のムは是より來りしが如し。吳音にては某謀は共にムなり。其古音はメに近かりしなるべし。厶は又支の韻に屬し、私の本字にて、ワタクシの義あり、是



支尤兩韻相通じたるなり。余按ふに某某は別字にあらず、古へ同じ某の字を假借法に由りて、別義に用ゐしのみ。然らざれば謀の某と、煤、媒、楳の某とは、亦別字なりと言はざるを得ず。さるを字典に、說文を引き、媒は謀なり、二姓を謀り合はせて以て昏媾を成すなりといふは、兩字に存ずる某の字の同じきを諾するに當るなり。楳は梅と同字なり、古へ毎も某も同音なりしと見え、左傳僖公二十八年に、原田毎々、棄其舊而新是謀の如く、毎と謀と押韻した る例あり。詩に謀、媒通韻の例あり。

衛風

氓之蚩々、抱布貿絲、匪來貿絲、來即我謀、送子涉淇、至于頓丘、匪我愆期、子無良媒、將子無怒、秋以爲期、

此例啻に謀媒の通韻を示すのみならず、蚩、絲、淇、期も丘も、共に同韻なりしを證す。支微齊佳灰と尤と押韻の例は、尙廣く之を示

すべし。

支尤押韻の例。

周南

肅々兎罝、施于中逵、赳々武夫、公侯好仇、

邶風

絲兮絲兮、女所治兮、我思古人、俾無訧兮、

鄘風

大夫君子、無我有尤、百爾所思、不如我所之、

衛風

投我以木李、報之以瓊玖、

小雅

物其有矣、維其時矣、

同



吉甫燕喜、既多受祉、來歸自鎬、我行永久、飲御諸友、包鼈鱠鯉、侯誰在矣、張仲孝友、

同

賓載手仇、室人入又、酌彼康爵、以奏爾時、

大雅

誕降嘉種、維秬維秠、維穈維芑、恒之秬秠、是穫是畝、恒之穈芑、是任是負、以歸肇祀、

同

維昔之富、不如時、維今之疚、不如茲、

齊佳灰と尤と押韻の例。

周南

參差行菜、左右采之、窈窕淑女、琴瑟友之、

衛風

泉源在左、淇水在右、女子有行、遠父母兄弟。

秦風

終南何有、有條有梅、君子至止、錦衣孤裘、顏如渥丹、其君也哉、

小雅

憂心甚疚、我行不來、

同

沔彼流水、朝宗于海、鴥彼飛隼、載飛載止、嗟我兄弟、邦人諸友、莫肯念亂、誰無父母、

大雅

今也日蹙國百里、於乎哀哉、維今之人、不尚有舊、

諸聲字には、支微齊佳灰と尤との通韻の例、割合に多からず。左に見當れるものを擧ぐ。

基字　諸聲字　基字　諸聲字

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 旣 | 廐 | 垂 | 郵 | 隹 | 售 | 鬼 | 蒐 |
| 九 | 軌 | 咎 | 晷 | 不 | 否 | 不 | 杯 |
| 音 | 培 | 某 | 媒 | | | | |

詩の押韻法と、諸聲文字の組織法とに基づき、尤の韻所屬の文字にして、古へ支の韻に通じたるものを考ふるに、其の主なるものは、左の類なりしが如し。

尤訧疣就鷲　有宥侑囿　右佑祐　友　又　久玖疚畝　九鳩

仇究　求裘球毬救　臼舅舊　牛　不罘　富　負　廐　咎

丘　謀　母　牡　郵　售　蒐

以上の文字は、其往來、支の韻にのみ限りたるにはあらず、中には蕭肴豪に胯り通じたる例もあり。

小雅

於粲洒掃、陳饋八簋、既有肥牡、以速諸舅、寧適不來、微我有咎。

盈と舅咎と押せるは、支尤押韻の例なり。

小雅

有頍者弁、實維在首、爾酒既旨、爾殽既阜、豈伊異人、兄弟甥舅、

舅と押せる阜首は、蕭肴豪の韻に通ずるを常とせり。

小雅

發言盈庭、誰敢執其咎、如匪行邁謀、是用不得于道、

咎と道と押せるは、尤豪押韻の例なり。

唐風

羔裘豹袪、自我人究究、豈無他人、維子之好。

究は諧聲法に從へば、九の類なれど、此處にては、好と押せり。同樣に、仇も多くは支の韻の方なれど、豪の韻に通じたる例もあり。



小雅

彼交匪敖、萬福來求、

求の同族字は、常に支の韻に通ひたれど、求は此處にては敖と押せり。

此外、富牡の如きも、蕭肴豪の韻字と押したるとあり。

以上の例と反對にして、常に蕭肴豪に通ひたるものにして、支又灰と押したるとあり。左に其例を擧ぐ。

大雅

天不湎爾以酒、不義從式、既愆爾止、靡明靡晦、

酒は他の例にては多く蕭肴豪の韻字と押せるを見る。

右に緣故ある例にして、蕭の韻と佳の韻と押したるとあり。

小雅

決拾既佽、弓矢既調、射夫既同、助我舉柴、

諧聲法に由れば、調は周に從ひ、柴は此に從ふ。

支と尤

然れども、支の直ちに蕭肴豪と通じたるは、其例至つて稀なり。

尤蕭肴豪の關係は後に說くべし。

戰國以後支と尤と押韻の例灰は支に從ふ。

荀卿成章篇

聖知不用愚者謀、前車已覆後未知更何覺時、

宋玉招魂

層氷峩々、飛雪千里、歸來歸來、不可以久、

秦之罘刻石

職臣遵分、各知所行、事無嫌疑、黔首改化、遠邇同度、臨古絕尤、

趙王之歌

爲王餓死兮、誰者憐之、呂氏絕理兮、託天報仇、

賈誼鵩鳥賦

德人無累兮、知命不憂、細故蒂芥兮、何足以疑、

司馬相如上林賦

拖蜺旌靡雲旗、前皮軒後道游、

史記龜筴傳

王若遣之、宋必有咎、後雖悔之、亦無及已、

楊雄甘泉賦

於是棄輿廼登夫鳳凰兮而翳華芝、駟蒼螭兮六素虬、

班婕妤自悼賦

奉供養於東宮兮、託長信之末流、共灑掃於帷幄兮、永終死以爲期、

班彪北征賦

余遭世之顚覆兮、罹塡塞之阨災、舊室滅以丘墟兮、曾不得乎少留、

前漢書叙傳

文豔用寡、子虛鳥有、寄言滛麗、託風終始、

易林

不見叔姬、使伯心憂、

曹昭東征賦

貴賤貧婦不可求兮、正身履道以俟時兮、

張衡西京賦

伯益不能名、隸首不能紀、林麓之饒于何不有、

王延壽靈光殿賦

葱翠紫蔚礪碨瑰瑋含光晷兮、窮奇極妙棟宇已來未之有兮、

陳琳正欲賦

惟今之夕之何夕兮、我獨無此良媒、雲漢倬以昭回兮、大水混而光流、

劉邵趙都賦

羣后紛其既醉、遠人仡其宴喜、悅皇風之舄弈、羨我邦之殷阜、

楊方合歡詩



生爲併身物、死爲同棺灰、秦氏自言至、我情不可儔、

## 第四　支の三類(支、脂、之)

支の韻の中にて歌に通じたるものあり、又尤に通じたるものあり、其類同じからざりしが如し。韻鏡には止の類を三種に分てり。第一種は、平聲支、上聲紙、去聲寘にて、第四第五の兩轉之に屬し、第二種は、平聲脂、上聲旨、去聲至にて、第六第七の兩轉之に屬し、第三種は、平聲之、上聲止、去聲志にて、第八轉之に屬せり。此分別の理由學者知る者少し。諸家の詩賦につき、細かに古韻を檢するに、歌に通じたるは第一種(支)に屬し、尤に通じたるは第三種(之)に屬したりしと歴々として證あり。第二種には、尤に通じたるものも、歌に通じたるものも相共に混ぜり。是より韻鏡に隨ひ、支の韻所屬の文字を分拆すべし。互に相接近し、屢〻相往來したる古韻の、晩唐

の頃迄、大體其類別を保ち來りしは、不思議といふも猶餘あり。

第一種(支)

支枝歧岐妓技跂芰翅　皮陂疲披彼被帔　竒奇徛漪錡剞欹羇

綺倚寄騎　此貲雌毘疵泚訾紫批鮆觜皆　离離籬禧螭羅擒漓

璃醨魑　麗釃驪鸝邇　義羲嘰犧蟻儀議　池馳施迤弛酏

只咫軹枳　氏抵祇紙舐　宜誼　卑碑脾陴稗俾諀婢髀移眇侈

爾彌邇瀰　斯澌　知痴智　臂譬避　徙屣蓰　多　企　褫

差　兒　貴　巵　寘　刺　縊　易賜　是提匙　戲　漬積

羅　晉　飛　麾　糜　靡　縻　爲　嬀　僞　危　詭　跪　委　萎　痿　逶　諉　餧

垂　陲　騅　捶　睡　規　窺　闚　蠵　嬛　璃　隋　隨　髓　衰　吹　炊　揣　瑞

惴　恚　惡　藥　羸　累　劑　虧　毀　燬

第二種(脂)

旨　脂　指　至　致　緻　次　茨　恣　咨　懿　比　毗　紕　妣　屁　庇　死　屍　尼　柅

示　視　祁　私　几　肌　飢　机　耆　著　嗜　丕　邳　否　諮　姉　柿　遲　墀

稗　美　、　備　糒　尸　師　篩　獅　夷　姨　咦　痍　鴟　地　懿　犧　異

冀　閟　秘　七　牝　自　辨　鼻　濟　劓　伊　咿　兕　利　黎　二

四　柶　悲　鄙　矢　雉　絺　肄　肆　履　躓　貳　膩　棄　眉　湄

鄙　媚　隹　推　帷　誰　維　錐　帷　惟　唯　季　悸　綏　癸　葵　揆　卒　醉　翠　萃

位　遺　匪　饋　簣　遂　燧　穟　隧　邃　墜　水　追　鎚　出　帥　逵

龜　壘　類　穗　彗　晷　軌　歸

第三種之

之　芝　止　祉　趾　士　仕　志　以　似　其　欺　基　棊　碁　期　旗　騏　綦　台　飴

怡　貽　笞　詒　始　治　寺　時　持　詩　峙　侍　恃　痔　姬　已　紀　起　記　忌　喜　嬉

僖　憙　饎　司　詞　祠　笥　里　狸　理　俚　悝　釐　吏　使　史　駛　巳　祀　汜

耳　恥　餌　疑　癡　擬　子　字　思　齒　宰　辭　茲　慈　滋　矣　涘　俟

醫　熾　幟　置　値　市　試　事　而　菑　輜　意　譱　徵

厠　絲　蚩　嗤

詩經にては、第一種(支)の文字の、歌に通じて、尤に通じたる例少く、第三種(之)の文字の、尤に通じて歌に通じたる例稀なり。左に第二種(脂)所屬の文字につき、詩經の用法を示すべし。

北風

出宿于泲、飲餞于禰、女子有行、遠父母兄弟、問我諸姑、遂及伯姊、

鄘風

蝃蝀在東、莫之敢指、女子有行、遠父母兄弟、

同

相鼠有體、人而無禮、人而無禮、胡不遄死、

衛風

碩人其頎、衣錦褧衣、齊侯之子、衛侯之妻、東宮之妹、邢侯之姨、譚公維私、

手如柔荑、膚如凝脂、領如蝤蠐、齒如瓠犀、螓首蛾眉、

鄭風

風雨凄々、雞鳴喈々、既見君子、云胡不夷、

魏風

毋曰嗟予季、行役夙夜無寐、上愼旃哉、猶來無棄、
兄曰嗟予弟、行役夙夜必偕、上愼旃哉、猶來無死、

小雅

春日遲々、卉木萋々、倉庚喈々、采蘩祁々、執訊獲醜、薄言還歸、赫々南仲、玁狁于夷、

同

卉木萋止、女心悲止、征夫歸止、

同

魚麗于罶、魴鱧、君子有酒、多且旨、

物其旨矣、維其偕矣、

同

昊天不惠、降此大戾、君子如屆、俾民心闋、君子如夷、惡怒是違、

同

菀彼柳斯、鳴蜩嘒々、有灌者淵、萑葦淠々、譬彼舟流、不知所屆、心之憂矣、不遑假寐、

同

有渰萋々、興雨祁々、雨我公田、遂及我私、彼有不穫穉、此有不斂穧、彼有遺秉、此有滯穗、伊寡婦之利、

右の諸例より、一般を推するとを得べし。此等の文字詩經の頃より、聊か他の二種所屬のものと區別のありたるものと見え、其類相互の間にて押韻ずること多し。又微齊佳灰と相通じたるにも、自ら定限ありしが如し。間接の方面より、此等の諸字の性質を推せば、支の韻及び之の韻に關係して其縁故何れに近かりしか之を判斷するとを得べし。

幽風

七月流火、九月授衣。

火は歌の韻なり、故に衣と押す所の姨私も、支の方なるべし。

七月流火、八月萑葦、

葦と遠とは共に韋を基とせる同族字なり、故に遠と押す所の闕夷は、支の方なるべし。

小雅

無害我田穉、田祖有神、秉畀炎火、

穉と押す所の祁私利、及び同族字遲と押す所の夷、又基字犀と押す所の脂眉は、皆支の方なるべし

小雅

彼何人斯、居阿之麋、無拳無勇、職爲亂階、既微既尰、爾勇伊何、爲猶將多、爾居徒幾何、

階と同族字の偕・喈も歌の韻に通ぜしなるべし、故に偕と押す所の死と旨及び喈と押す所の遲・祁・夷は支の方なるべし。喈は又嘉と押し、嘉は更に悲と押す、因りて知る悲も亦支に屬するを。

北風

行道遲々、中心有違、不遠伊邇、薄送我畿、

邇は支に屬す、是より又遲の所屬を察し得べし。禰は邇の同族字なり、故に之と押す所の泲・姊も支の方なるべし。

衛風

泉源在左、淇水在右、女子有行、遠父母兄弟、

弟は右と押す、然るに弟は禰・泲・姊と指と偕・死と押せるは、既に示せるが如し、因りて此等の諸字支なるべきも、或は又之なるかとの疑を生ずるとあり、是は唯往古通韻法の嚴密ならざるを表はすのみ。

大雅

維此王季、因心則友、

季は友と押す、故に季と押す所の寐・棄は之の方なるべきか、然るに、寐は屆と押し、屆は又夷・遲等と押せるは、示したるが如し、因りて又季・寐・棄は支の方なるべきかとも思はるれど、或は兩種に跨り通じたるものなるべし。

支に屬する垂の字の、諸聲字なる郵の基字となるが如きは、寧ろ異例といふべし。氏の類は、皆支に屬せり、然るに鴟は脂の中にあり、鴟は詩には尤の韻に通ぜり。

大雅

懿厥哲婦、爲梟爲鴟、

脂の所屬の文字は、微の韻に通へると多し。詩の能く之を證するのみならず、諧聲字の組織も亦之を示す、貴と遺、希と絺、歸と歸と

の如し。微の韻にも古へ歌の韻と尤の韻とに胯り通じたる文字あり。

豳風

七月流火、九月授衣、

周南

薄澣我衣、害澣害否、歸寧父母、

地は也の聲に從ひ、綏は妥の聲に從ふ字なれば、支の韻に屬したるべきと疑なし。

要するに、脂の韻は、支の韻と、之の韻との中間に位し、其所屬の文字、往々支之の兩類に胯り通じたるとあり。又昔し一方に接し居りしものゝ、後他方に近づくに至りしものもあり。然れども、古韻にては脂は未だ十分獨立の資格を具へざりしと明かなり。韻鏡にて、之を他より分ちしは、唐の時代にありては、其別の稍顯著なりしに由りてなるべし。

余は支の古韻の歌に通じたるもの　尤に通じたるものとの二類は、歌尤の兩韻と緣故を絶ちし後、遙かに唐時代に至るまで、雙方共に其大躰は、分れ居りたるとを信ず。今煩を省くがため漢時代は略し、漢以後の詩賦のみに徵し、兩々相對照して之を證すべし。

魏文帝善哉行

上山采薇、薄暮苦飢、谿谷多風、霜露沾衣、野雉羣雊、猴猿相追、還望故鄉、蔚何壘々、高山有崖、林木有枝、憂來無方、人莫之知、人生如寄、多憂何爲、我今不樂、日月如馳、

王粲詠史詩

自古無殉死、達人所共知、秦穆殺三良、惜哉空爾爲、結髮事明君、受恩良不訾、臨沒要之死、焉得不相隨、妻子當門泣、兄弟哭路垂、臨穴呼蒼天、涕下如綆縻、人生各有志、終不爲此移、同知埋身劇、心亦有

所施。生爲百夫雄。死爲壯士規。黃鳥作悲詩。至今聲不虧。

曹植洛神賦

於是忽焉縱體以遊以嬉。左倚采旄右蔭桂旗。攘皓腕於神滸兮。采淵瀨之玄芝。余情悅其淑美兮。心振蕩而不怡。無良媒以接歡兮。託微波而通辭。願誠素之先達兮。解玉佩以要之。嗟佳人之信脩。羌習禮而明詩。抗瓊瑤以和予兮。指潛淵而爲期。執眷眷之款實兮。懼斯靈之我欺。感交甫之棄言兮。悵猶豫而狐疑。收和顏而靜志兮。申禮防以自持。

謝靈運游南亭詩

時竟夕澄霽。雲歸日西馳。密林含餘清。遠峰隱半規。久痗昏墊苦。旅館眺郊岐。澤蘭漸被徑。芙蓉始發池。未厭青春好。已覩朱明移。感々感物歎。星々白髮垂。藥餌情所止。衰疾忽在斯。逝將候秋水。息景偃舊崖。我志誰與亮。賞心惟良知。

王康琚反招隱詩

小隱々陵藪。大隱々朝市。伯夷竄首陽。老聃伏柱史。昔在大平時。亦有巢居子。今雖盛明世。能無中林士。放神青雲外。絕迹窮山裏。鵾鷄先晨鳴。哀風迎夜起。凝霜凋朱顏。寒泉傷玉趾。周才信衆人。偏智任諸巳。推分得天和。矯惟失至理。歸來安所期。與物齊終始。

兵運侍宴送張徐州應詔詩

詰旦閶闔開。馳道聞風吹。輕蓂承王輦。細草藉龍騎。風遲山尙響。兩息雲猶積。巢空初鳥飛。苻亂新魚戲。寔惟北門重。匪親孰爲寄。參差別念舉。肅穆恩波被。小臣信多幸。投生豈酬義。

謝朓呈沈尙書詩

淮陽股肱守。高臥猶在茲。況復南山曲。何異幽棲時。連陰盛農節。鑾笠聚東菑。高閣常晝掩。荒階少評辭。枕簟清夏室。輕扇動凉颸。嘉魴聊可薦。綠蟻方獨持。夏李沈朱實。秋藕折輕絲。良辰竟何許。夙昔夢

佳期、坐嘯徒可積、爲邦歲已暮、絃歌終莫取、撫枕令自嘆、

北音即ち中原音は、早く已に江南音と異なり居りしものと見え、韻鏡以前、唐人の詩は、兩韻の區別明確を欠くものありといへども、然れども概して尙之を示すもの多し。今左に盛唐の詩家の作二首を例に出だす。

蘇頲侍宴安樂公主新宅應制詩

駸々羽騎歷城池、帝女樓臺向晚披、露灑旌旗雲外出、風廻巖岫雨中移、當軒半落天河水、遶徑全低月樹枝、簫鼓宸遊陪宴日、和鳴雙鳳喜來儀、

孟浩然、陪張丞相自松滋江東泊渚宮詩

放溜下松滋、登舟命楫師、寧忘經濟日、不憚沍寒時、洗憤豈獨古、濯纓良在茲、政成人自理、機息鳥無疑、雲物凝孤嶼、江山辯四維、晚來風稍緊、冬至日行遲、獵響驚雲夢、漁歌激楚辭、渚宮何處是、川溟欲安之、

右孟浩然の詩に見えたる遲の字は、師の字と共に、韻鏡にては脂の韻に屬せり。此遲の字、漢の古詩には左の如く押韻せり。

千里遠結婚、悠々隔山陂、思君令人老、軒車來何遲、

上は阿・蘿・宜、下は輝・蕤・爲と押せり。

是に由りて之を觀るに、遲は漢の時代には、支の韻に近かりしも、唐の時代には之の韻に近づきたるものゝ如し。

今の齊・佳・灰所屬の文字につき、詩經の押韻法と、諧聲文字の組織法とに由り、細かに古韻を探り試みしに、多少の例外なきにはあらざれど、概して言へば、齊・佳は支・脂と微とに通じ、灰は之に通じ居りたるを見るなり。又佳に佳皆の別を立つれば、佳は多く支に通じ、皆は多く脂に通じ居りたる證迹あり。

第一種(支)と第三種(之)と相押せるは異例なれども、尙散見するとと

あり。

邶風

魚網之設、鴻則離之、燕婉之求、得此戚施、

屈原九歌

入不言兮出不辭、乘回風載雲旗、悲莫悲兮生別離、樂莫樂兮新相知、

是は或は二句切なるべし、若し然りとせば上二句と下二句とは其押韻別なり。

荀卿成章篇

世之禍惡賢士、子胥見殺百里徙、穆公得之彊配五伯六卿施、

蔡邕釋誨

予惟悼哉、害其如是、天高地厚、跼而蹐之、

蔡琰胡笳

日暮風悲兮邊聲四起、不知愁心兮說向誰、是原野蕭條兮烽戍萬里、俗賤老弱兮少壯爲美、逐有水草兮安家葺壘、牛羊滿野兮聚如蜂蟻、

これ見當れるものを取りて、其儘出だせるに過ぎず。

柳宗元南磵中題

秋氣集南磵、獨遊亭午時、廻風一蕭瑟、林景久參差、始至若有得、稍深遂忘疲、羈禽響幽谷、寒藻舞淪漪、去國魂已遠、懷人淚空垂、孤生易爲感、失路少所宜、索莫意何事、徘徊秖自知、誰爲後來者、當與此心期、

唐人の詩には、此の如き押韻往々これあり。然れども、支脂之の、全く混同せるは、宋の時代に入りてよりなり。劉淵が平水韻增に、同用の支脂之を略して、支の一韻に改めしは、三韻其響の別を失ひしに出りてなるべし。

支の韻の三類を通じて、總べてエに近き響なるべかりしは、前に

既に之を說けり。尙精しく正せば、歌に通じたる類と、尤に通じたる類とは、其聲に差異ありたるなるべし。按ふに尤に通じたる方は其ェ韻、オ又はウに近かりしが如し。此類の中にある文字にて、我古書には、意をオ、已をコ、其、棊、期をゴに當てたる例もあり。此類、漢、より晉に連り、尤のみならず、魚虞の韻にも通じたるとあり。支と魚虞と押韻の例 灰は支に從ふ

劉章耕田歌

深耕概種、立苗欲疎、非其種者、鉏而去之。

賈誼弔屈原文

彼尋常之汙瀆兮、豈能容夫吞舟之巨魚、橫江湖之鱣鯨兮固將制於螻蟻、

蟻の魚と通ぜしは異例なり、

韋孟諷諫詩

正遐由近、殆其茲怙、嗟々我王、曷不斯思、

太史公自序

晏子儉矣、夷吾則奢、齊桓以霸、景公以治、

麻は魚虞に從ふ。

司馬相如子虛賦

觀壯士之暴怒與猛獸之恐懼、徼兢受詘殫觀衆物之變態、

王褒僮約

結網捕魚、繳鴈彈鳧、登山射鹿、入水擿龜、

易林

塗行破車、醜女無媒、莫適爲偶、孤困獨居、

同

孟春已丑、哀哉仲父、明德訖終、虎亂滋起、

蔡邕短人賦

熟地蝗兮蘆即且、繭中蛹兮蠶蠕須、視短人兮形如斯、

斯の且須と押せるは異例なり。

陳琳大荒賦

覽六五之咎休兮、貧尼而富虎、嗣反覆其若茲兮、豈云行之臧否、

劉楨魯都賦

春秋二七、天漢指隅、民胥被禊、國子水嬉、

徐幹室思詩

妾身雖在遠、豈違君須臾、既厚不中薄、想君時見思、

夏侯惠景福殿賦

曾櫨外關、榱桷內附、或因勢以連接、或邪詭以盤備、

陸機凌霄賦

判烟雲之騰躍、半天步而無旅、詠凌霄之飄々、永終焉而弗悔、

同

九十八

削陋迹於介丘兮、省僊遊而投軌、覬情累以遂濟兮、豈時俗之云阻、

陸雲詩

願登扶桑、仰結飛晷、伊人匪存、遺芳孰與、

同陸丞相誄

靖端夙夜、匪寧匪處、經始綿々、傍沱淮海、

楊方合歡詩

我情與子親、譬如影追軀、食其竝根穗、飲其連理杯、

## 第五　尤と蕭肴豪

古へ尤は蕭肴豪と通ぜり。尤の支と通ぜる類と、蕭肴豪と通ぜる類とは、自ら別ありしが如し。然れども、中には兩韻に通ぜるものあるを見れば、其の互に相近かりしと言ふまでもなし。

尤蕭肴豪押韻の例。

召南

畔彼小星、維參與昴。肅肅宵征、抱衾與裯。寔命不猶。

邶風

終風且暴。顧我則笑。謔浪笑敖。中心是悼。

鄘風

牆有茨、不可掃也。中冓之言、不可道也。所可道也、言之醜也。

衛風

碩人敖敖。說于農郊。四牡有驕。朱幩鑣鑣。翟茀以朝。大夫夙退、無使君勞。

王風

彼采蕭兮。一日不見、如三秋兮。

鄭風

清風在軸。駟介陶陶。左旋右抽。中軍作好。

齊風

221970

無田甫田、維莠驕驕。無思遠人、勞心忉忉。

魏風

碩鼠碩鼠、無食我苗。三歲貫女、莫我肯勞。逝將去女、適彼樂郊。樂郊樂郊、誰之永號。

唐風

揚之水、白石皓皓。素衣朱繡。從子于鵠。既見君子、云何其憂。

秦風

豈曰無衣、與子同袍。王于興師、修我戈矛。與子同仇。

陳風

月出皓兮。佼人懰兮。舒懮受兮。勞心慅兮。

檜風

羔裘如膏。日出有曜。豈不爾思、中心是悼。

曹風

冽彼下泉、浸彼苞蕭。愾我寤歎、念彼京周。

小雅

呦々鹿鳴、食野之蒿。我有嘉賓、德音孔昭。視民不恌。君子是則是傚。
我有旨酒、嘉賓式燕以敖。

同

秩々斯干、幽々南山、如竹苞矣、如松茂矣、兄及弟矣、式相好矣、無相猶矣。

同

既醉既飽、小大稽首、神嗜飲食、使君壽考。

同

隰桑有阿、其葉有幽。既見君子、德音孔膠。

大雅

雝々在宮、肅々在廟。不顯亦臨、無射亦保。

同

誕后稷之穡、有相之道。茀厥豐草、種之黃茂。實方實苞、實種實褎。實發實秀、實堅實好。

同

江漢浮々、武夫滔々。匪安匪遊、淮夷來求。

周頌

其笠伊糾、其鎛斯趙、以薅荼蓼。

魯頌

思樂洋々、薄采其茆。魯侯戾止、在洋飲酒。既飲旨酒、永錫難老。順彼長道、屈此羣醜。

尤・蕭・肴・豪通韻諸聲字の例。

基字　諸聲字

高　敲　告　嗨

| | | |
|---|---|---|
| 包 | 抱 | 巢 |
| 卯 | 聊 | 號 |
| 高 | 熇 | 交 |
| 兆 | 桃 | 鳥 |
| 少 | 抄 | 堯 |
| 帚 | 掃 | 壽 |
| 寸(手) | 討 | 柔 |
| 缶 | 匋 | 首 |
| 翏 | 膠 | 幼 |
| 周 | 調 | 翏 |
| 憂 | 擾 | 缶 |
| 丩 | 叫 | 秋 |
| 丂 | 扣 | 幺 |

| | | |
|---|---|---|
| 繅 | 鴞 | 皎 |
| 嶋 | 撓 | 濤 |
| 猱 | 道 | 拗 |
| 寥 | 窌 | 秋 |
| 幽 | | |



以上尤・蕭・肴・豪通韻の例、及び之に關する諧聲字の例は、其古韻の同一なりしか、然るにあらざれば、近似なりしを、十分證し得たりと信ず。さて其古韻は、如何なる類の韻なりしか、時代遙かに遠く、其迹既に消えて、辿り行くに便ならず。本居宣長氏は、韻鏡と我古書とを對照し、豪をアウ、肴をアウ(漢)、エウ(吳)、蕭をエウ、尤をイウ(漢)、ウ又ユ(吳)の韻と定められき。然れども、是は韻字の未だ斯く分別せざりし、周時代の韻にあらざりしは明けし。

先づ蕭の韻について考ふるに、韻鏡には、其入聲借字に、藥の韻を當てゝあり。因りて或る人は、其假名をイャウ或はャウなるべしと推斷せり。韻鏡のみに隨へば、實に然るとなながら、唐時代の音は、既に轉化したる音なれば、是を以て商周時代の音を推すと能はざるは、固より論を俟たず。又入聲字は、其音轉化し、其製作時代の本音とは異なるもの多ければ、決して韻を判定する標準と爲す

と能はず、蕭より肅・嘯の出で、叔より椒の出でたるが如きは、此等を一概に、シャウの假名と爲し難き證なり。又肖を基としたる文字に、屑も削もあり、勺を基としたる文字に、約も的も釣もあり、卓を基としたる文字に、悼も掉もあり、翟を基としたる文字に、躍も糴も曜もあり、弱を基としたる文字に、溺も嫋もあり。其唐以後の音と古音とは、大に異なれるを知るべし。本居氏が、我古書に、要はエ、蕭はセウとあるより、一般に蕭の韻をエウの假名と定めたるは、意ふに原音に近きが如し。これ夙くより、我國に傳はり來りたる支那音の、隋唐交通後に入り來りたる音とは、明かに其の同じからざるを示すなり。

今左に現時の支那音に由り、蕭・肴・豪・尤の四韻を比較すべし。

| | 蕭 | 肴 | 豪 | 尤（侯） |
|---|---|---|---|---|
| 官話 | イアオ iao | イアオ iao | アオ ao | イウ iu　エウ eu |
| 上海 | イオ io　イオ io | オ o　ウ n　ウ u | オウ o | イウ iu　エウ ne |
| 福州 | イウ iu　アウ au | オウ o | オウ o | イウ iu　オ o |
| 厦門 | イアオ iao　アウ au | オウ o | アウ au | アウ au |
| 廣東 | イウ iu　アオ ao | オウ o | アウ au | アウ au |

拗音はヤウ(yau)、ヨウ(yeu)、ユ(yu)等と書くも、記法は異なれど、其響は同一なりと知るべし。

支那音の羅馬字綴字法は、人に由りて稍異なる所あり。右はウ井ルヤム氏の比較表に由りたるものなれば、精確ならざる所ありといへども、大躰相互の關係を示すには、差支なかるべし。但し實際は、南方の地にては、諸音の混じ居る處多しと知るべし。肴の韻は、我吳音は官話に近く、漢音は廣東音に近し、福州厦門は漢音の方なり。豪の韻は官話は漢音、他は吳音なり。尤の韻は上海は吳音、官話福州厦門は漢音、廣東は別音なり。官話にも亦此音雜り居れ

り、即ち福州を其郷音の如く、ホクチウと言はずして、フウチヤウと呼ぶが如し。官話の尤は、廣東の蕭に同じく、廣東の尤は官話の蕭に近く、其關係の相轉換せるは奇なりといふべし。

蕭には今示したるが如く、イアオ(iao)とイウ(iu)との別あり。此兩者の間に、古韻のエウ(eu或はieu)の存在を假定すると、決して不當の億測にあらざるべし。尤にも亦エウに近き聲ありたりとせば、其の互に相通ぜしと、敢て深く怪しむに足らず。前に部謀をエ韻なりと定め、支灰の韻に通ぜしを説明せしが、此に至りて愈〻其の當れるを知るべし。

韻鏡にては第二十五轉效の下に、豪交肴蕭の別あり。此轉外轉に屬し、豪は一等、直音アウ、交(肴)は二等、拗音イアウ、肴(蕭)は三等、拗音イエウ、蕭は四等、直音エウなりしが如し。二十六轉の四等に又肴あり。二十五轉の蕭と、二十六轉の肴とは、兩者の韻の響に稍異なりたる所ありたるなるべけれど、今は隱微にして、其別を辨へがたし。尤はエウなりしか、イウなりしか、未だ確かならずといへども、是にも亦拗音と直音との別ありしなり。

我漢音吳音と、今の支那諸州の音とを以て、此韻鏡の音に比するときは、奇なる關係あるを見るなり。

肴の古韻は、吳音の方を取り、蕭に近かりしと見る方可なるが如し。若し雙方の間に、差異ありたりとせば、韻鏡の交肴の、イアウ(iau)とイエウ(ieu)との如き、至つて相近かりしものならん。豪はアオ(ao)又アウ(au)を取らんか、或はオ(o)又オウ(ou)を取らんか、我古書には、高をコ、刀をト、保、褒、寶、報、抱をホ、毛をモに當てたるが如く、オの韻に用ゐたる例多けれど、また草、早をサ、稻をタ、腦をナ、藐をハに當てたるが如く、アの方に用ゐたるもあり。アは即ちアウの頭音なり。アウとオウとは、其發音の距り遙かなるにあらず、我音にてア

ウは、屢〻オウとなるを見ても、其轉化の容易なるを知るべし。原音はオウよりも寧ろアウに近かりしかと思はるゝ所あり。さればイエウを中心とし、一方にてはイアウ、アウ、一方にてはエウ、イウに通じたるは、これ蓋し發音自然の運用なり。況んや古韻にては、此等の差異も甚だ微にして、殆ど同音にきこえたるべかりしにや、其間に自由の通韻を許したるに於てをやゝる變化は、我音にては、稍困難の如く見ゆべけれど、支那音に取りては、其性質より考ふるも、決して奇とすべき所あらざるなり。自然の音聲に基づける、嘍々たる草蟲、呦々たる鹿鳴の嘍と呦との如き、今は蕭と尤とに分れ屬し、其韻は異なり居れど、古は同聲に聞こえたるものなるべし。

尤・蕭・肴・豪の押韻は、晉の時代に至るまで、其痕迹を留むるを見る。左に煩を省くがため、漢以後の詩賦のみを擧げて例を示す。

劉邵趙都賦

擊靈鼓鳴籲簫、乘素波鏡清流、

嵇康琴賦

觸巖觝隈、鬱怒彪休、洶涌騰薄奮沬揚濤、

成公綏嘯賦

假象金革擬則陶匏、衆聲繁奏若笳若簫、

陸機演連珠

臣聞傾耳求音、眡優聽苦、澄心狥物、形逸神勞、是以天殊其數、雖同方、不能分其惑、理塞其通、則並質不能共其休、

臣聞動循定檢、天有可察、應無常節、身或難照、是以望景揆日、盈數可期、撫臆論心、有時而謬、

陸雲贈鄭曼季詩

拊翼墜夕、和鳴興朝、我之思之、言懷其休、

左思魏都賦

德連木理、仁挺芝草、皓獸爲之育藪、丹魚爲之生沼、裔雲翔龍、澤馬于阜、山圖其石、川形其寶、

前に支と尤との關係を論ぜし時、詩經に調の字と柴の字と押したる例あるを示せり。柴の基字の此は、支の第一種(支)に屬し、歌の韻と通じたるべき字なり。此例を敷衍して考ふれば、古へ歌と蕭と通じたりし例あるべかりし筈なり。諸聲字沙、紗等の基字の、少の字なるは、此例に適す。遙かに後世の作なる道藏歌に、此押韻法あり。

彈璈北寒臺、七靈曜紫霄、濟々羣僊舉、紛々塵中羅、

歌と蕭と、其間に音脈の通じ居りたるを知るべし。然れども、支の第一種(支)と、蕭肴豪と通じたる例の少かりしが如く、歌と蕭肴豪と直ちに押したるは、至つて稀なりしが如し。

## 第六　尤と侯

爰に說殘したるものあり、其は尤の韻と親しき關係を有する、侯の韻なり。韻書或は之を分つあり、或は之を合するあり、韻鏡にては、侯尤共に流の下にありて、侯は一等、尤は二等、三等、四等に位せり。今の支那音にては、侯は官話ェウ(eu)、上海ゥ(u)、福州ェウ(eu)、厦門オ(o)、廣東アウ(au)なり、又官話をアウ、上海をェウと記せるもあり。詩に見えたる古韻にては、兩者の關係如何んと原ぬるに、事豫想の外に出で、兩者の通韻に用ゐられたるは、至つて少く、又侯の蕭肴豪と通じたるも甚だ稀なり。之に反し、侯は魚虞と密接の關係ありしなり。

侯と魚虞と押韻の例。

鄭風

羔羊如濡、洵直且侯、彼其之子、舍命不渝、

唐風

綢繆束芻、三星在隅、今夕何夕、見此邂逅、

小雅

賓爾籩豆、飲酒之飫、兄弟既具、和樂且孺、

同

南山有枸、北山有楰、樂只君子、遐不黃耆、樂只君子、保艾爾後、

同

父母生我、胡俾我瘉、不自我先、不自我後、好言自口、莠言自口、憂心愈々、是以有侮、

同

荏染柔木、君子樹之、往來行言、心焉數之、蛇々碩言、出自口矣、巧言如黃、顏之厚矣、

大雅



予曰有疏附、予曰有先後、予曰有奔奏、予曰有禦侮、

同

敦弓既句、既挾四鍭、四鍭如樹、序賓以不侮、

同

曾孫維主、酒醴維醹、酌以大斗、以祈黃者、

諸聲字も亦同樣の關係を示す

| 基字 | 諸聲字 | 基字 | 諸聲字 |
|---|---|---|---|
| 區 | 歐 | 殳 | 投 |
| 俞 | 偷 | 敷 | 藪 |
| 禺 | 偶 | 婁 | 樓 |
| 取 | 陬 | 需 | 孺 |
| 矛 | 務 | 豆 | 豎 |

侯と魚虞との押韻は、遠く晉の時代にまで及べり。

宋玉風賦

浸淫谿谷盛怒於土囊之口、緣泰山之門舞松柏之下、

麻は魚虞に從ふ。

楊雄趙充國頌

在漢中興、充國作武、赳々桓々、亦紹厥後、

古詩

東方千餘騎、夫壻居上頭、何用識夫壻、白馬從驪駒、

光武賜侯霸書

崇山幽都何可偶、黃鉞一下無處所、

易林

升高登虛、欲有望候、駕之北邑、與喜相扶、

張衡西京賦

敬慎威儀、示民不偷、我有嘉賓、其樂愉々、



蔡邕胡黃二后頌

允茲漢室、誕育二后、曰胡曰黃、方軌齊武、

王延壽靈光殿賦

賢愚成敗、靡不載敘、惡以誡世、善以示後、

曹植贈丁翼詩

秦箏發西氣、齊瑟揚東謳、脅來不虛歸、觴至反無餘、

陸雲漢高盛德頌

咸陽克殄、既係秦后、峩々阿房、乃清帝宇、

楊泉蠶賦

爰求柔桑、切若細縷、起止得時、燥溼是候、

周の時代といへども、尤蕭侯豪と、侯魚虞と、全く關係なかりしとはいふべからざれども、詩に見えたる少數の例につき、細かに正すに、古韻には、其所屬甚だ疑はしきものあり、其は傍に注を付

す。

衛風

匪來貿絲、來即我謀、送子涉淇、至于頓丘、

謀は唐韻莫浮切にして韻鏡にては尤に屬せり。故に古韻も侯にはあらざるべし。

秦

豈曰無衣、與子同袍、王于興師、修我戈矛、與子同仇、

矛は唐韻莫浮切、集韻迷浮切音謀なり、故にまた古韻尤の方なるべし。

齊風

子之茂兮、遭我乎猱之道兮、並驅從兩牡兮、揖我謂我好兮、

茂は唐韻莫侯切にして韻鏡にては侯の去聲に屬せり、故に侯の方なるが如し。然れども、茂の古文は楙にて、矛の聲に從ふを見れば、古韻は矛と共に尤の方なりしが如し。牡は唐韻莫后切にして、侯の方ならんか、然れども牡は士の聲に從ひ、坯風に濟盈不濡軌、雉鳴求其牡の如く、支の韻に通じたる例あり、而して支に通ぜしは、多くは尤の方なりしなり。

小雅

吉日維戊、既伯既禱、田車既好、四牡孔阜、矢彼大阜、從其羣醜、

戊は唐韻莫侯切音茂にして、侯の方なるが如しといへども、前の茂の音より推すときは、尤の方なりしかとも思はる。

王風

緜々葛藟、在河之涘、終遠兄弟、謂他人母、謂他人母、亦莫我有、

母は唐韻莫厚切にして、韻鏡にては侯の上聲に屬せり。然れとも周南にも薄澣我衣、害澣害否、歸寧父母の如く、母は衣と押せり。

母は他にも支微と押韻の例あり、支微と押せるものは、他の例に隨ひ、古韻尤の方と見るべきか。

以上の諸例韻鏡にては、皆唇清濁音に屬するも亦奇なり。

尤と侯

鄘風

載馳載驅、歸唁衛侯、馳馬悠々、言至于漕、大夫跋涉、我心則憂、

此詩始めて、明かに虞侯と尤豪との關係を示すが如し。然れども又疑を抱いて考ふれば、載馳載驅、歸唁衛侯、の處にて、二句切に韻の切れたるものなるかも知るべからずと思はるゝなり。

斯く尤と蕭肴豪と通じ、侯と魚虞と通じたるは、其例多きに拘はらず、尤と侯とは其關係の薄かりしを見れば、其響に差異のありたるを推して察すべし。按ふに尤のエに近かりしに對し、侯はウに近かりしならんか。諸聲字にも、尤侯兩韻の通じたるは、秀と透、浮と桴との如き、僅少の例あるのみ。又尤と魚虞、侯と蕭肴豪の通じたる例も多からず、芻と鄒、聚と驟、壽と鑄、孚と殍、夭と奏、卯と貿との如きは其例なり。

詩經に尤の蕭肴豪と通じたる例多く、魚虞と通じたる例少かりしは、既に示せるが如し。又尤と魚虞との往來は、前漢の初期より、漸く顯著と成り來りしは、事實なり。然れども、其以前、其迹なからざるには、あらざりしと見え、丘區の二字に、顏師古說を附して曰く、

古語丘區二字音不別、今讀則異、

又薑の字は、諧聲法區に從へど、丘と通ぜり。

韓愈韓辯

律曰不諱嫌名、釋之者曰謂若禹與雨丘與薑之類是也、

先秦時代にありては、かゝる例は寧ろ破格の如く見ゆ。他に尙同類の例多かりしや否や、他日の考證を待つ。

尤と侯とは、古へ緣故遠かりしとせば、何故に後世尤侯を以て一韻と爲しなるか。余また之に關して說あり。支尤蕭肴豪と、侯魚虞とは、互に相往來したる形迹あり。さかして、支と蕭肴豪と魚虞と

は、後相分れ、尤と侯とは相近づき、遂に一韻となれるなり。請ふ之を論ぜん。

第七　支尤蕭肴豪と侯魚虞

支と侯と共に魚虞に通ぜしより又支と侯と互に相押したる例あり。

韋孟諷諫詩

享國漸世、垂烈於後、乃及夷王、尅奉厥次、

前漢書敘傳

侯王之祉、祚及孫子、公族蕃衍、枝葉惕茂、

徐幹齊都賦

羽族盛興、毛群盡起、上蔽雲穹、下被皐薮、

尤、蕭、肴、豪と侯、魚、虞と押韻の例。

三略



强弱相虞、莫適禁禦、延及君臣、國受其咎、

牧乘七發

王良造父爲之御、秦缺樓季爲之右、

韋孟諷諫詩

務此鳥獸、忽此稼苗、蒸民以匱、我王以媮、

同在鄒詩

微々小子、既耆且陋、豈不幸位、穢我王朝、

司馬相如上林賦

然後揚節而上浮、凌驚風歷駭猋、乘虛無與神俱、

劉向九歎

顏微黧以沮敗兮、精越裂而衰耄、裳襜々而含兮、夜納々而掩露、

楊雄長楊賦

旦盲者不見咫尺而離婁燭千里之隅、客徒愛胡人之獲我禽獸、曾

不知我亦已獲其王侯。

孔臧鴞賦

觀之歡然、覽孝經書。在德爲祥、棄常爲妖。

班固西都賦

若臣者徒觀迹於舊墟、聞之乎故老。十分未得其一端、故不能徧舉。

同幽通賦

渾元運物流不處兮、保身遺名民之表兮、

易林

國破爲墟。君子犇逃。

同

范子妙才、戮辱傷膚。後相秦國、封爲應侯。又傷我飢膚、邦家難憂。

傅毅洛神賦

昆山美玉、濤海明珠。金銀璆琳、翠黛貂旄、



李尤平樂觀賦

或以馳騁、覆車顛倒。鳥獲扛鼎、千鈞若羽。

張衡東京賦

因休力以息勤、致歡忻於春酒。執鑾刀以祖割、奉觴豆於國叟。降至尊以訓恭、送迎拜乎三壽。

馬融廣成頌

上無飛鳥、下無走獸。虞人植旃、獵者効具。

劉楨瓜賦

豐細異形、圓方殊務。揚暉發藻、九采雜糅。

陳琳大荒賦

雖遊目于西極兮、大道卷而未舒。仍皇靈之攸暢兮、爰稽余之所求。

徐幹齊都賦

主人盛饌、期盡所有。三酒既醇、五齊惟醹、

同

栞梗林燎圃草、驅禽翼獸、十干惟族。

曹植箜篌引

秦箏何慷慨、齊瑟和且柔、陽阿奏奇舞、京洛出名謳。

胡綜黃龍大牙賦

舍契河洛、動與道俱、天贊人和、僉曰惟休。

華覈自責文

不敢違敕、懼速罪誅、冒承詔命、魂逝形留。

道藏歌

玉龜七寶林、唱讚願同舟、丹景曜目精、令我心躊躇。

張載七哀詩

狐兎窟其中、蕪穢不復掃、頹壟並壑發、萌隸營農圃。

陸機感丘賦





抨神爽以嬰物兮、濟性命而爲仇、忘大暮于千祀兮、爭朝榮須臾。

陸雲陸丞相誄

乃幹中軍、入作內輔、公侯涉降、在帝左右。

郭璞神嘘贊

腳屬於頭、人面無手、厥號曰嘘、重黎所處。

黃庭經

三神之樂由隱居、倏欻遊遨無遺憂。

東晋の末期に近づくに隨ひ、諸韻相分れて、漸く往來の迹を藏し、獨り尤と侯とは、殘りて一韻となり、更に深き關係を結ぶに至れり。尤侯相通は、漢より魏に入り、魏より晋に移るに隨ひ、其の迹次第に現らはれ、晋末より宋齊梁に進みては兩者全く一韻となりしは、謝靈運、顏延之、謝朓、任昉其の外諸家の作之を證して十分なり。

尤侯及び蕭肴豪の、夫々魚虞と緣を絶つに至りしは、尤侯も蕭肴豪も、共に其の韻の聲の延びたるに由りしなるべし、而して、尤侯と蕭肴豪とは、其聲を異にし、岐を分ちて、進むに別路を取り、尤は侯に伴はれ、長く密接の關係を保ち來りし、蕭肴豪に暇を告げて、始めて分離せるなり。是より先、支は魚虞と全く緣を絶ちたるもの丶如し。蕭肴豪の三韻に至りては、既に東晉の頃より、互に獨立の傾向ありたりといへども、宋齊の人の詩に、尚押韻したる例あり。此三韻、南北朝の末期に近づくに至り、漸次に相分れたるものなるべし。唐に入りては、肴も豪も獨用となれるを見れば、三韻互に獨立せしと明かなり。

我古書に用ゐられたる假名は、魚虞尤侯蕭肴豪の相通ひし當時の音を寫したるが如く、思はるゝものあり。拗音を直音に變へたるが如き、日本化の音あるは、勿論なれど、尚其諸韻の間に存じ居りたる。大躰の關係を示すに足るべし。

| | | | |
|---|---|---|---|
| ク | 尤 | 侯 | 虞 |
| コ | 丘 | | 區 |
| ゴ | | 彩 | 矩 |
| ス | 周 | | 孤 |
| ツ | | 鬪 | 居 |
| ツ | | 豆 | 高 |
| ト | | 斗 | |
| フ | 不 | | 吳 |
| フ | | | 御 |
| ブ | | 部 | 須 |
| ホ | 富 | 裒 | 都 |
| ム | | 牟 | 圖 |
| | | | 渡 |
| | | | 扶 |
| | | | 步 |
| | | | 譜 |
| | | | 無 |

| | | |
|---|---|---|
| 魚 | 豪 | 蕭 |
| 矩 | | |
| 居 | 高 | |
| 御 | | |
| | 刀 | |
| | 保 | |

モ　母　謨　毛
ユ　由　愈
ヨ　餘　遙
ル　留　樓　盧
ロ　漏　路　呂

更に尤侯の兩韻のみを取りて比較すれば、吳音にては兩者の一韻なりしを證す。

尤　侯
ク　久　口　尤　侯
ル　流　樓　浮　部

支尤魚虞蕭肴豪の諸韻の往來は、遠く前漢の時代より、既に其例ありしは、詩賦に由りて示せるが如し。我國渡來の支那音には、魚虞蕭肴豪尤侯所屬の文字の音、互に相近かりしもの多きを見れば、其中に、東晉より晩からざる音あるを示すものゝ如し。其後屢々兩國の間に往來ありて、後世の音も傳はり來りたるものなれば、未だ以て、輕々しく支那音傳來の年代を億斷すると能はず。分けて、尤侯兩韻の如きは、今も尚江南地方に、ウの聲の存ずる處あるを見れば、一概に之を魏晉の古韻と見做すと能はず。只魏晉の頃を以て、最初の支那音傳來の時期と爲す假定說に、十分立脚の餘地あるを認むるのみ。

尤侯一韻となりて、他より離れし後は、如何なる類の聲となりしか、我漢音にては、侯の韻にはオウ、尤の韻にはイウの假名を付す、オウとイウとにては、其關係遠きが如し。梵漢對譯を以て比するに、同字に兩種の借音あり。

羅睺羅　ラグラ　Laghula
摩睺羅伽　マホラガ　Mahôraga

これ對譯の稍不精密なるを示す。又腺の位置に休を用ゐたるもあり。

摩休勤　マホラガ　Mahôraga

按ふに、尤侯一韻となりて、獨立せし頃は、オー又ウーに近き聲なりしなるべし。此オーは、英の廣長au の類なりしかと思はるゝ所あり。今支那諸州に、侯の韻は、アウ又エウ、尤の韻は、アウ、エウ又イウと響く地方多し。是より推して、古の韻を察することを得るなり。侯と尤とは近かりしといへども、全く同一ならざりしと見え、唐時代には侯と尤と又幽との別を設け、通じて同用と爲せり。韻鏡には、流の下に、侯を一等、尤を二等、三等、尤又幽を四等に置けり。而して一等二等を開口呼、三等四等を齊齒呼と爲せり。委しく正せば、尤幽も別ありといへども、此處にては、韻鏡等位の別の論に移るを好まず。侯と尤とは唐時代にては、粗我漢音の別の如くなりしならんか、實際支那音にては、之よりも尚其聲の相近かりしと知るべし。但し侯は一等にありてオウは直音、尤は二等三等にありてイウは拗音なり。されど我假名にては、精確に支那音を寫すと能はず。梵漢對譯を見ても、尤侯兩韻の間の尚我假名の音より、近かりしを悟るべし。

## 第八　魚と虞

魚虞の、晉の中頃まで、蕭肴豪及び尤侯の諸韻と伴ひ來りしは、既に述べたるが如し、魚虞の兩韻は、何れの時代に於いて分別せしか、是亦探究を要す。東晉時代より詩賦を引いて其證迹を原ぬべし。

孫綽遊天台山賦

三喬控鶴以冲天、應眞飛錫以躡虛、騁神變之揮霍、忽出有而入無。

陶潛讀山海經詩

歡言酌春酒、摘我園中蔬、微雨從東來、好風與之俱、泛賢周王傳、流觀

山海圖。俛仰紛宇宙不樂復何如。

謝靈運擬魏太子鄴中集詩

嗷々雲中鴈、擧翮自委羽。求涼弱水湄、違寒長涉渚。

顏延之宋郊祀歌

貲威寶命、嚴恭帝祖。炳海表岱、系唐胄楚。

江淹擬劉琨贈盧諶詩作

窮戚扣角歌、桓公遭乃擧。荀息冒險難、實以忠貞故。

齊梁の頃、魚虞押韻なきにあらざれども、其例漸く減ぜり。北朝の詩賦の韻に至りては、不幸にして材料に接せざるが故、窺知ると能はずといへども、南朝と共に變遷ありたるものと見え、唐に入りては、魚虞の外に模の韻ありて、魚は獨用、虞模は同用となれり。是より魚虞兩韻相通はず。正韻及び韻學大成には、唐宋の古韻を、虞獨用、魚模同用となせるはいかゞ。唐時代、魚虞兩韻の別に至りては、和漢對譯、梵漢對譯、共に不精密にして、憑據と爲すと能はず。韻鏡を見るに、魚に一等なく、齒音と喩母の喉音を除くの外、皆三等に位す。これ其の、齒音喉音の四等に位する者を除くの外、皆拗音なるを示す。又遇の下に、模と虞とありて、模は一等直音、虞は齒音と喩母の喉音を除くの外、皆三等に位し。其の齒音喉音の四等に位するものゝ外は、拗音なるを示す。魚虞共に、齒音喉音の四等に位するものあるは、其音の特質より出でたるにて、寧ろ例外と見るも可なり。魚の方は、我漢音のキョ、ギョ、ショ、ジョ、チョ、ヂョ、リョの類にして、虞の方はキュ(ク)ギュ(グ)シュ、ジュ、チュ、ヂュ、リュ(ル)の類なりしなるべし。模は直音なれば、コ、ゴ、ソ、ゾ、ト、ド、ロ、ホ、ボ、ポ、モの類なりしか、或は虞と同用なるを見れば、之に近く、ク、グ、ス、ズ、ツ、ヅ、ル、フ、ブ、プ、ムの類なりしなるべし。梵漢對譯にては、之をオとウとの兩韻にて寫せるを見れば、實際はオとウの間の聲なりしな

らんか。一說に魚と虞とには開合の別ありて、魚は開に屬し、虞は合に屬すと。韻鏡を考ふれば、或は然るべしと思はるゝ所あり。然りとせば、魚虞兩者の間の隔離するに至れるは、論を要せざる事なりとす。



明治卅一年五月十二日印刷
同　年五月十五日發行

版權所有

著作兼發行者　神奈川縣相模國高座郡海老名村大字中新田千五百二十九番地　大島正健
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　保阪治
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍
東京市日本橋區通三丁目　丸善書店
大賣捌　大阪市心齋橋筋北久寶寺町　丸善書店出張所

ㅋ 20-1

# 賣捌書店

東京神田區表神保町　中西屋書店
横濱辨天通二丁目　丸屋書店
京都河原町通二條下　大黑屋書店
名古屋京町一丁目　野崎寛次郎
函館末廣町　魁文舍
神戸相生橋　熊谷久榮堂
長崎柳屋町　安中半三郎
熊本新二丁目　長崎二郎

支那古韻考 前編
大島正健著

国立国会図書館

821.1
O812.s2

082358-000-6

821.1-O812s2

支那古韻考 前編

大島 正健/著

M31
DAE-0172